「田郷虎雄日記」

——1941(昭和16)年1月－6月分の翻刻と解題

Tsukasa IZUMI(和泉司 : Associate Professor, Toyohashi University of Technology)

✉ sktmzi0918@gmail.com

(日本)豊橋技術科学大学総合教育院准教授。近現代日本語文学、文学賞研究。主著に『日本統治期台湾と帝国の文壇(文学懸賞)がつくる(日本語文学)』(東京：ひつじ書房, 2012)、「邱永漢「濁水溪」から「香港」へー直木賞が開いたものと閉ざしたもの」(『日本近代文学』第90集, 2014)、「殖民地の喫茶店で何を(語れる)かー日本統治期台湾の都市と若者」(『アジア遊学226建築の近代文学誌』勉誠出版, 2018)など。

A Reproduction of *Torao Tago's Diary* of January-June 1941, with Bibliographical Notes

This paper is comprised of the reproduction of a six-month period of *Torao Tago's diary*, which in total covers the six years from 1940 to 1945. Tago became famous after his play won second place in a creative writing contest sponsored by the magazine *Renovation* in 1931. This period is covered in the diary, from January to late May 1941. Tago then went on a press trip to Manchuria on May 24, 1941 at the request of the Manchurian railway company. Tago's thoughts during this period seem to have been recorded in another notebook, as detailed, relevant information cannot be found in his original notebook. However, text that seems to have been published by Tago after returning from the trip have been included in this paper as a reference.

Keywords Diary(日記), Manchuria(満州), Play(演劇), Drama(ドラマ)

1

本資料は、戯曲作家・小説家の田郷虎雄(1901-1950)の遺した日記(以下、「田郷虎雄日記」と称す)の翻刻である。『跨境』第7号および第8号掲載の1940(昭和15)年1月-6月分と7月-12月分に引き続き、1941年の前半分を公開する。解題については、第7号をご参照いただきたい。

2

本資料は今回、「田郷虎雄日記」全体のうち、1941(昭和16)年の1月1日から6月30日までの半年分を翻刻したものになる。残り4年半分も、順次公開を続けていく予定である。

1941年前半について特筆すべき点は、同年5月24日から7月14日にかけて、田郷虎雄は満鉄の招聘により、「満洲」旅行に出かけていることである。1939年に続き二度目の「満洲」旅行の目的は、「満洲」内の各地域に住んでいる人々に対する慰安・慰問を目的とする「厚生船」および「厚生列車」の取材であった。

その内容には非常に貴重なものになると思われるが、残念ながら田郷は本日記をこの取材旅行には携行しなかったらしく、旅行中の記事はほぼ「詳細は別記」と記され、通過地程度しか記載されていない。この「別記」は「当時のノート」とされるものに記載されていると日記中に記されているが、現在、この「当時のノート」の所在は不明である。

田郷はこの取材旅行に基づいて、帰国後にいくつかの記事を発表している。「満ソ国境報告」(『大陸』1941年10月号)、「厚生列車添乗日記(抄)」(掲載誌不明)、「厚生列車寸描」(掲載誌不明)などである。

このうち後二者については、原資料はなく、田郷虎雄の保存していた切り抜き等をそのご家族がPC入力して保存していたデータから確認した。故に掲載誌、発表時期は現時点で不明である。今後当時の雑誌・新聞資料から探すこととしたい。

今回は、この「厚生列車添乗日記(抄)」および「厚生列車寸描」を参考資料として末尾に掲載した。掲載に関しては、田郷虎雄ご家族からおわけいただいたデータのままの形式とした。

翻刻は、以下のような凡例に従って行った。

凡例

- 1 原則として、漢字の旧字・俗字・異体字は通行のものに改め、旧仮名遣

いは原文のままとした。但し、本文中、旧仮名遣いで表現すべき箇所が現代仮名遣いになっている箇所も多く、それらはそのままとした。

例1 「っ」は大文字の場合と小文字の場合が混在している。

例2 「～ようだ」は旧仮名遣いでは「～やうだ」となるが、本文で多くは「～ようだ」と表記されている。

また、人名については、旧字を用いている場合はそのままとした。

2 誤記・誤字・脱字が明白な箇所はその箇所の直後に()を付してその括弧内に正確な表記を記入した。

3 句読点及び改行については、判別が難しい場合、翻刻者が適宜判断した。また、文末で句点がない箇所については、翻刻者の判断で適宜句点を追加した。

4 原文は縦書きであるが、本資料は横書きで表記するため、「くりかえし」を示す各種記号の中で、横書きに適さないものは翻刻者の判断でひらがな・カタカナに書き換えた。

5 人名、地名の羅列が行われている箇所では、適宜読点等を補った。

6 日記本文では、書籍名・雑誌名にカギ括弧がつかなかったり、省略表記をしていたり(例:「小学生の科学」→「小科」)、漢字をカタカナに開いて表記したりしているが(例(「少女倶楽部」→「少女クラブ」)、基本的に原文のままにした。

7 日付の前に「○」や「⊗」がついている日付がある。現状、意味は不明だが、原文のまま記載している。

8 各月冒頭「諸事要録」欄に、月内に書いた原稿の数量と受け取った原稿料が記載されている。この欄については、その文学史上の資料的価値から、原文の形式より見やすさを優先することにして、各月の体裁を統一し、作品タイトルや掲載紙誌名、出版社等の記述を分かる範囲で正確なものに整えた。また、原文では漢数字が用いられているが、この項目についてはアラビア数字に置き換えた。

一月諸事要録

仕事

小説「亜細亜の柱」『子供の科学』	23枚
感想「素人劇の出発点」『国民演劇』	7枚
小説「南方の詩」『令女界』	20枚
戯曲「暖簾を棄てゝ」『雄弁』	20枚
計	70枚

収入

『日本少年文学名作選』編集費	10円
JOAK「木枯」テスト立会の車代	5円
小説「亜細亜の柱」『子供の科学』	66円

小説「南方の詩」『令女界』

34円

計

115円

一月一日(水) 快晴

三時起床。お茶だけを飲んで一家四人で家を出る。明治神宮参拝である。気にしてゐた風邪も幸ひ大したことなく、無事参拝を終る。——去年は除夜の鐘とともに家を出たため、猛烈な参拝者で電車の乗降りにも困難を感じたが、今年は時間をわざと遅らしたために左程でもなく幸ひであつた。帰途、昨年同様、旗ヶ岡八幡に詣づ。この頃より夜やうやく明け初め、甚だ氣持がよい。

六時、家で祝賀の膳につき、みんな、それぞれに学校の拝賀式に行く。私も六ヶ年つゝいた旗台後援会役員としての最後の列席をすべく出かける。

天気予報と相違して申分のない好天氣で氣持、甚だ爽快である。後援会の名刺交換会も例年と異り、なかなか悠長。洋子と京子が迎へに来たので、私は中座し、四人で兄の家を訪ふ。

夕方近くまで遊び、風邪を恐れて五時頃帰る。

四人で、五目並べ、花札、トランプなど

——以下補遺欄につゞく

して遊ぶ。…かうした家庭的な、ゆとりのある和樂も久しぶりである。

三十代を終わった去年は、流石に名状しがたい感懷に捕はれたが、既に四十一を数へる本年の元旦には、そのやうな感傷を感じない。國が二十世紀の第一年を踏み出したのと同じく、自分も亦、いよいよ実りの秋に向つて精進しようとの緊張を覚えるばかりである。さうだ、もはや感傷はない。意力だ、行動だ、今年こそは、良い仕事をしよう。…それにしても去年の最後の三ヶ月ばかり充実した生活をなしたことは今年への歩みのためにも、まことに幸ひであつた！

×

今年も昨年同様、年賀状を廃したが、賀状をよこす人もなかった。唯、小佐君から久しぶりの便りの外、浅野君近藤君その他から手紙やら著書やらが来たばかりである。

一月二日(木) 晴

八時起床。朝湯に行き、ゆっくりと食卓の前で新聞をひらく。——と、ひよっこりと正一郎君がやってきた。同伴して銀座から日本橋に出、陶雅堂で小皿を買ひ、日比谷で蜷蛸子三部を求めた後、美松で一休みした後、正一郎君を宮城遙拝に伴ひ帰宅する。兄の一家、既に来てゐる。

やがて阿部君一家も来り、酒を汲みかはすうち、間もなく割当てられた一升の酒も飲み干し、喜劇を演じつゝ登美子、梅田屋に泣きついて更に一升を求め来

り歓声をあげる。

千北研一君、平戸の岡山氏の令息を伴ひ来訪。大一座となって更に酒を汲みかはす。私は例によって一眠り眠ったが、座敷の余興の声に目をさまし、その仲間に入る。さんざん歓を尽して、千北氏等は八時辞去、兄や阿部君達は茶漬で一食したる後、九時ごろ帰る。…この頃には酔がさめてしまっている、ひとり一本半ほど飲んで寝につく。

陶雅堂で買った清水焼の酒器は素敵にいゝ。すっかり気に入った。

一月三日(金) 快晴

八時半起床。京子と朝湯に行く。今日も冬とは思へぬからりと晴れて暖い上天気である。

正一郎君を明治神宮に参拝にやり、浅^{アサ}の君に明夕訪問する旨の葉書を出したりしてあるうちに、十二時を過ぎてしまふ。一時過ぎ一家で阿部氏を訪問。兄の方は来客あり、少し遅れるといふので、先に酒を始める。すっかり酔ってしまって、例のごとく眠る。夕方近くまで眠ってしまふ。目が覚めると阿部君と兄は、兄の教へ子である馬場茂君を加へて、盛に気焰をあげてゐる。私はお湯に入って、酔をさまし話の仲間に加はる。兄や阿部君の酔ひ甚だしく、兄はしきりに弟自慢を始める。…兄のかういふ酔ひ方を見るのは始めてである。

八時半辞去。

今年は仕事がうんと出来さうで何かなし心がはづむ。

一ぱい飲んで眠る。

一月四日(土) 晴

今日も朝寝。西久保櫻川町の第百銀行の支店に行つて、昭和書房からの小切手を現金に替へ、西久保巴町郵便局で六千円ほど貯金して、銀座に出る。平戸の兄から依頼された懐中時計を求めるために服部に行つたが、一時からでなくては売れぬといふから、日比谷で自著を買つたり、ブラジレイロでコーヒーを飲んだりして時間をつぶしてから出かける。ところが、時計は腕巻の、しかも一種かぎり、番号札の順で渡すのだといふ。仕方なく自分のだけを買ひ、銀座の他の時計店を調べて廻つたが、精工社の懐中時計は、現在製造を中止してゐるさうで、場末の店でストックを探すより外はないとのこと。けっきよく、登美子のために安い腕巻を買ひ、自宅の近くで、やっとな個、義兄の希望に近いものを見つけて、それを送ることにする。

浅野君宅を登美子と二人で訪問。例の二組会である。ヒレ酒で酔ひすぎ、タキシード六円をフンパツして帰る。

この夜、正一郎君は岩手に向つて出発。一泊か二泊して、すぐまたこゝに

帰って来るといふ。

安藤誓君より明日訪ふとの速達。

一月五日(日) 晴

正月になって(元日は別)はじめて早く起きたが、朝食後また一睡する。

今日は松浦素氏邸で平戸会の年賀である。午後一時、松屋に集まる。田中采之助氏は来たが、黒崎義介君が、なかなか来ないので、千北君と三人、イチゴ三箱をおみやげにしてタキシーで松浦邸に向ふ。黒崎君は門の外に来て待つてゐる。

(藤浦洸君は婦人の母堂逝去で不参)松浦氏、田中氏、黒崎氏に著書を贈る。暗くなるまで談笑して辞去。四人で大塚駅前でお茶を飲んで別れる。黒崎君に家に寄るやうにと誘はれたが、安藤君が待つてゐるだらうと思ひ、ことはって別る。

安藤誓君を加へて、一家でトランプや花³⁷をして遊ぶ。すゝめて泊らせることにし、一緒にお湯にゆく。

同番地居住者に入宮する人あり、登美子はそれの祈願祭に参列する。

一月六日(月) 晴

今日もまた素晴らしいお天気だ。暖い。

安藤誓君を加へて朝食、つとめがあるので同君は朝食後辞去。

久田の兄へ時計代の残金を送る。洋子と京子を使ひにやる。

一家四人での貯金が、やっと七百円を越す。今年中に少くとも三千円にする予定であるが…。

春陽堂に行き、西沢君に逢ひ、金七拾五円返却する。丸善で自著一冊求めて新橋まで歩き。明治製菓でコーヒーをノンで帰る。正一郎君、盛岡より帰つてゐる。

大島万世君来訪。松田君の「土に叫ぶ」を借りに来たのだが、色々しやべって夕方近く帰る。義姉来る。絹のかうもり傘。洋子、嫂たちと「民族の祭典」を見るところで泊りがけで美知子のところへ行く。正一郎君、銀座に買物に出かけて、かなり晩く帰る。

西澤揚太郎君に金七拾五円返す。春陽堂にて。

一月七日(火) 雨、夕方より雪となる。

朝寝。小雨の中に鬼火焼をなす。洋子は美知子の家に泊って帰らなかったの

で、京子、正一郎とともに焼く。七草増水の代りに雑煮を食べる。

一握の種子(日本青年団編の戯曲集)など拾ひ読みして、終日なんといふことなしに送る。明日から仕事をはじめめるのだからそれもいゝだらう。

京子と正一郎、兄の家に出かけた後は炬燵の上で登美子と五目並べなどして通す。夕飯も二人きり。朝からの小雨、夕暮れから雪となる。去年はまるで雪らしい雪も降らなかったのも、何となく嬉しい。雪は豊年の兆などといふ古語を思ひ出しながら…。

×

正午にはぜんざいをする。

×

鈴木一意、井上桂、小嶺の三氏から馬車と口笛や螟蛉子の礼状。安藤誓氏、久田の正子和子よりも手紙。

一月八日(水) 雪(雨)、午後止む。

今日から又みんな学校だ。正一郎も大阪に帰る。みんな出て行った後、ひとり静かに新聞を読みながら、「雄弁」の戯曲のテーマを考へる。なかなか明暗も浮かばない。

正午前に京子も登美子も帰る。昼食後一睡する。

おやつに昨日の残りの「しるこ」を食べる。頗るおいしい。荏原町駅近くの本屋まで散歩。入浴。夕食。ワカナ一郎の放送を聞く。

仕事開始第一日。つひに黒星だ。けっきょくブドウ酒一合を飲んで眠る。…酒を手に入れること愈々困難になる。

箕輪氏より「馬車と口笛」の礼状。日本演劇協会より入会勧誘状。園池氏より葉書。

講談倶楽部の広告。この日の朝刊に載る。(算術の宿題)

一月九日(木) 晴

「亜細亜の柱」にかゝる。産業ばかりで投げ出し、午後家を出る。運動不足の気味があるので、五反田まで歩き、それから新宿に出る。エルテルで大島万世君と落合ひ、園池氏を待ってゐるところに、同氏から電話があり、銀座で落合ふことにして、コロンバンに行く。

三人で二丁目(銀座)の何とかいふ肉屋で、スキヤキをつつつきながら新年の挨拶と今年の計画などを語り合ふ。三人とも今年あたりを境にして上昇線に向つてゐるのでお互ひ話が合ふ。千疋屋で果物を食べ、新しくスキヤキ寄りに出来たオリンピックでコーヒーを飲んで別れる。

自分にはまだ送って来ないが、自分の脚本「木枯」所載「農村文化」本日送り来たれる由で、園池氏が見せてくれる。

一月十日(金) 晴

「亜細亜の柱」出来さうで出来ない。で、思ひきって加藤武雄氏を訪問することにする。野口青村君の飛んでもないデマに対する説明のためである。加藤氏不在。で、帰って手紙を書くことにする。

夕食をしながら春場所の角力実況放送を聞く。今日が初日である。藤崎二男君、帰郷の挨拶に来る。

暮の風邪が残ってゐるせゐか、昨日あたりから、どうも気分がすぐれない。今夜も催眠剤を飲んで早く休む。

講談倶楽部(算術の宿題所載)今朝送り来る。

一月十一日(土) 晴

「亜細亜の柱」つひに今日も午前中で投げ出す。

夕食前後はラヂオをかこんで、春場所の角力実況放送を一家で聞く。

明日は日曜でも早く起きて「亜細亜の柱」を書くつもりで早く休む。

一月十二日(日) 晴

「亜細亜の柱」で苦勞する。今年に入ってから、まだどうしても調子が出ぬ。連日黒星といふところだ。

午後はあきらめてラヂオの「傷病兵慰問」の午後を聞き、それから郵便局に用達^{ようたつ}がてら散歩に出る。大隈、小林の両君に小包(螟蛉子)正子に少女倶楽部を送りに行ったのだが、小包の切は過ぎてゐたので、中延から電車に乗って帰る。お湯に行く。帰ってみたら、既に安藤誓君が来てゐた。角力の放送を聞きながら、日本酒がないのでビール三本を飲む。同君が持参した洋子京子の写真から、古い写真までとり出して談笑したる後、同君は九時ごろ帰る。その後すぐ床に入って、ほんのしばらくまどろむと、それからすっかり目がさめて、明方の五時近くまで不眠。今年は何とかして蘭印に行きたいものだと考へ、その方法などを考へて夜を明かす。

蘭印、々々、々々！ぜひ行きたいものだ。

安藤君は故郷(熊本)から送って来たといふ白い餅を持って来てくれた。今年の東京の餅と違ってホンモノである。

一月十三日(月) 晴

昨夜は今朝の五時近くまで眠れなかったので、みんなが出て行った後、床についたが、ホンの十分ばかりうとうとしてすぐに覚める。

加藤武雄氏から手紙が来る。去る十日に出した手紙に対する返事である。非常に友誼に満ちた手紙で、「螟蛉子」に対するお礼も述べてあり、その中に収めてゐる「満洲国」に因んで羅振玉家蔵の拓本を進呈しようとも書いてある。すっかり嬉しくなる。やはり、思ひきって手紙を出しておいてよかったと思ふ。そして更に野口君のデマに関して弁明の手紙を出す。

加藤氏の手紙は嬉しかったが、それと同時に大村さん(登美子の友人。もとの蒲地精子さん)から夫君の訃報も来た。登美子弔問に出かける。

角力の実況放送を聞き、催眠剤を二服のんで早く休む。…この数日来、どうも健康が面白くない。運動不足のためであらうか。

京子、昨日よりお尻に「おでき」が出来、それに頭痛がすると言って、これも元気がない。

一月十四日(火) 晴

今日も亦、冬とも思へぬ好天気である。木炭不足の冬に対する天恵でもあらうか。然し、新聞は水の不足と感冒の流行を伝えてゐる。それに昨年一冬中、殆ど雪らしい雪も降らなかったから、今年は少しは降らしたいものだ。

ところで、今日といふ今日はと思って意気こんでゐた「亜細亜の柱」やはり今日も思はしからず、半ペラで十枚ばかり書いて、つひに投げ出すそれに午後はまた頭痛と、かすかながら悪寒がする。少し気になる。寝ようかと思ったが、京子が案外早く帰ったので、気分転換のため銀プラに出る。内山保氏(基君の兄さん)に逢ふ。原稿紙のことを頼む。ブラジルでコーヒーを飲んで帰る。登美子も洋子も帰ってゐる。夕食の前後、例によって角力の実況中継を聞く。

朝の便で満鉄の拓殖課から義勇軍のカレンダーが送って来る。それを同時に放送局の横井君から「木枯」の放送が二十四日午後八時—四〇分の都市放送に決定した旨の通知(速達)が来る。

一月十五日(水) 晴

今日やっと「亜細亜の柱」四五枚近く書く。が、どうも持前の、すべが^ま如き調子が出ないので、午後は止す。

酒があれば宵のうちに寝て徹夜するつもりで、登美子に物色させたが日本酒は絶対になく、やっとビールが日本だけ手に入る。夕食の時、飲んで九時まで眠る。お湯に^いty手、十一時ごろから仕事にかゝる。やっと本式に書け出す。頑張れば出来ないこともないと思ったが、明方の四時ビール一本を飲んで眠る。

午前中、明日正午までに原稿を送る旨の速達を安宅君と篠原君に出し、散歩に行く。五反田往復。水瀬君(狩野)に逢ったので、幹部昇進のおよろこびを述べる。

大島万世君にも速達。

一月十六日(木) 晴

夜中の四時すぎにビール一本を飲んで寝たのだが、いつものとほりに起きて、朝食後さっそくとて机につく。今日の正午までに「亜細亜の柱」を絶対に届けると約束してゐるのだから、書かざるを得ぬ。正午までにあと三四枚といふところまでに漕ぎつけたけれど、どうも気に入らぬ。それに睡眠不足のせいか、どうも気分がわるい。止むなく今晚か明朝、書き直すつもりで午後はブラブラして暮す。夕食前後は例によって角力の実況放送を大さはぎして聞く。登美子は多少風邪気味で早く眠る。

「子供の科学」本日送り来る。予告の時に使った写真が使つてある。

催眠剤二服を服用して眠る。

放送局より二十四日の放送の配役その他、速達で通知し来る。

一月十七日(金) 晴

登美子、風邪気味で休む。おかげで何彼と便利。

朝食後、直ちに「亜細亜の柱」の書き直しにかゝり、午後一時脱稿、郵送しようかとも思ったが、約束の日和一日おくれてもゐることだから持参する。とりつぎを待ってゐるのが面倒くさいので、原稿を女給仕に渡して帰る。地下で銀座に出、三昧堂で「アジヤ民族の中心思想・印度篇」を買ひ、新橋でコーヒーをノンで帰宅。

留守中に「雄弁」の須永君、是非二十日までに原稿がほしいと言って来たとのこと。又、安藤君より明日、餅を持参するとの速達。

夕方、阿部夫人と香世ちゃん来訪。お砂糖を持って来てくれる。

一月十八日(土)○ 晴

昨日辺りで暖い冬も峠だらうと言はれてゐたが、依然として暖い。

今日は一気に令女界の仕事「南方の詩」を片付けるつもりであつたが、連日の催眠剤が祟りでもしたのか、頭の調子まるで面白からず、つひに終日なすところなく過す。午後ちょっと眠ってみようかとしてゐるところ、に芸術座の外野村晋君来訪。青年座の旗拳公演についての相談である。

大村(蒲地)さんの娘——洋子と同級生より大村さん死去の電報来る。少なからぬシヨツクを受ける。早速登美子を行かせることに。私は次のやうな会合に出かける。

午後四時 きゅーぺる 青年座

〃 五時 マーブル 開拓文芸委員会

〃 六時 愛婦本部農民文学演劇部研究会…園池、田郷、大島、山口太郎、下村千秋、中村星湖、上田久七、海老原績、古川良範その他

安藤誓君来宅(泊る)

一月十九日(日) 晴

日曜らしく朝寝。

暖い、実に暖い。

「国民演劇」創刊号の原稿を書き、約束の二時に間に合はすべく五反田からタキシードで牧野書店に行く。誰もゐない。同書店のポストに原稿を入れ、その旨、大島君に速達を出す。銀座に出、新橋でコーヒーを飲んで、阿部氏宅による。お酒を一合余りもらって帰る。この頃では酒を手に入れることが殆ど困難である。ところが帰ってみると、珍しく梅田から三合手に入っている。さっそく安藤君と角力を聞きながら飲む。一睡して九時起きる。安藤君はこの間に帰ってゐる。お湯に行き、仕事にかゝる。「南方の詩」である。やつと筋は思ひついたが、どうしても調子が出ないので、つひに残りの酒を飲んで眠る。

一月二十日(月) 晴 夜、猛烈な風

「南方の詩」筋もすでに大体まとまってゐるのに、相変らず調子が出ず、つひに北村君にある午後二時ごろまでに持参する旨の速達を出し、散歩して帰り、「雄弁」の戯曲の方を考へる。これも名案浮かばず。一体どうしたといふのか…。

今日は大寒の入りといふのに、ばかばかしく暖かであつたが、夕刻から俄然大荒れに荒れ出し、雷まで鳴り出す。

登美子は隣組常会で和田さんちに行く。

夜、うつろのごとき気持で過す。頭の洗濯を何とかしなくてはならぬ。

金比良町の父より手紙…二十三、四日頃宮下氏が上京するについての相談。

一月二十一日(火) 晴

昨夜の大嵐はガラリと収まって快晴、暖く春のやうだ。その天気にはひきかへて、私の気持は荒涼暗澹たるものがある。

さんざん遅らしてゐた「雄弁」の原稿(戯曲)を今日の正午まで届ける旨、堅く約束してゐたのだが、それがどうしても出来ないのだ。✕切日が来ても出来な

いで困ったことは今までにも度々があったが、いざとなれば何とかかんとかかたづけて来たのだが、今度といふ今度は、何と焦ってみても出来ないのだ。期が狂ひさうな気持であったが、午後一時、つひに悲壮な気持で断念し、須長君(雄弁)に、ことはりの電報と、大村氏夫妻の死を理由としての詫び状を速達を出す。同時に北村君(令女界)には明日とゞける旨の電報を出す。帰途、タバコ喫茶店に寄る。暮以来の頭髪でも刈ってサツパリとしようと思ひ、床屋に行く。

当面の仕事は出来なくて弱りきつてゐるが、今年の大きな仕事二つの方針はついた。

——以下補遺欄につゞく

○一月二十一日

即ち、十年後の「印度」と南部鉄瓶の組合を材とした一大社会戯曲を書くことだ。この二つだけは今年に是が非でも書かなければならぬ。私の真の価値と、そして運命はこの二作によって決定されることにならう。

多少…多少どころではない。かなりひどい神経衰弱気味に思へるが、心身の鍛練に努めて、今年からこそ大きな歩み方をしよう。

一月二十二日(水) 晴、夜一雨

不安といふより、むしろ恐ろしいと言った気持である。一体どうしたといふのだらう。朝の七時から机につき、筋も大体は頭の中にまとまってゐるのに、どうしても書けないのである。泣きたく狂ほしくなる。が、せん方なく、北村君(令女界)に明朝とゞける旨の速達を出す。芝白金局から出す。同時に女子科学塾の松井女史にも今日は行けぬから、二十六日に行く旨の速達を出し、兄の家に寄り、酒一合五勺を融通してもらって帰る。登美子日直、洋子と京子に夕飯の支度をさせ、角力を聞きながら酒を飲む。…双葉山、前田山に敗れる。ショックを受ける。しかし、角力を聞いてゐると、我々にはつくづく修養になる。宵に一睡して十一時から机につく。けっきょく三、四枚しか出来なかったが、どうやら何とかかなりさうな見透しがついて来たので、夜中の四時頃、床につく。幸ひにして、すぐ眠れた。

須長君(雄弁)から二十五日まで待つからは非原稿をほしいとの電報をもらう。

一月二十三日(木) 早朝雨、後晴

夜中の四時に寝たのだが、いつもと同じに起きる。宮下氏上京。朝食をすますや否や、宮下氏とろくろく挨拶もしないで机につく。「南方の詩」である。今日こそ届けなければ文士として全く切腹でもしなければならぬ。朝のうちに届

ける約束をしておいたのだが、けっきょく午後三時に出来上る。誠文堂から来た振替を現金にかへるつもりで行ったが、郵便局は既に休みなので、一旦家にひきかへし、宮下氏より一時立替えてもらって家を出る。新橋からタクシーを飛ばして宝文館へ、北村氏に原稿を渡して、すぐにまたタクシーを放送局に飛ばす。「木枯」のテストに立会ふためである。——演出は南江治郎氏、配役は村瀬幸子、月野道枝、水原彩子、田辺着男、若杉富士夫の諸君。舞台戯曲としてならば、かなり面白いと思ふが、ラヂオドラマとしては、なかなかむづかしい脚本である。係の連中もくたくたになってゐる。八時半テスト終了。まっすぐに帰宅。

一月二十四日(金) 晴

宮下氏、今日より海軍省に出勤。

難航に難航をつづけた「南方の詩」を昨日やっと届けた安心と疲労のためか、今日一気に書くつもりだった雄弁の素人劇、今日はつひにテーマさへ考へつかずに終る。

大隈君の著書「軍靴千里」までひっぱり出し、何かよき暗示はないものかと苦慮するが、何ひとつまとまらぬ。せうことなしに庭に焚火して消炭など作って過す。

春場所、本日千秋楽。東方優勝。個人優勝は我がヒイキ力士双葉山に決定。

夜、八時三十分より四十分間、都市放送でわが作ラヂオドラマ「木枯」放送。みんなで聞く。テストの時よりは流石によい出来だったが、機械が悪いので、細かい擬音など、まるで聞こえぬ。

やっと手に入れた酒一合を飲んで十時前に眠る。明日こそどんなことがあっても戯曲(雄弁)を何とかしなければならぬからと思って…。

一月二十五日(土) 早朝 雨 晴、夕刻小雨

朝食後、直ちに机につく。「雄弁」の依頼による素人劇脚本。たつての再度の依頼であり、それでは書くと約束したことだからして今日は是非何とかしなければならぬと思ふが、何しろ、いまだにテーマも定めてゐない始末で、実に苦しむ。が、転失業の問題につき考へてゐるうちに、とつぜん、「のれんを棄つ」といふ標題がまづ頭に浮び、午後三時までに、とにかくどうなり二〇枚書き上げる。とても郵便などでは間に合はないので、自分で持参する。講談社を問ふのは久しぶりである。が、須長君がゐらないので、受付に預け、新宿に出て、紀伊國屋でエミル・デルマンゲロのマホメット伝を求めて帰る。(白水社版)

美枝夫人と香世子ちゃんが来てゐる。家族の間で日米問題が真面目に話題となる。

寝しなに宮下氏と一杯やる。

一月二十六日(日) 晴

さんざん困り抜いてゐた「雄弁」の戯曲を昨日どうなりかうなり渡した安堵で久しぶりに日曜らしくのんびり暮す。但、あと「講談倶楽部」が待ってゐるので、同誌から送って来た「軍国の母」を読む。劇になりさうな話はなさうである。

友人を訪ねてゐた宮下氏が帰って来たので、二人で湯に行く。

夜、女子科学塾に松井女史を訪ね、お夕飯の御馳走になる。同女史の令妹や寄宿生を加へて、色んな話を聞く。つひ時間を過して、十時頃辞去。帰って酒一合飲んで寝る。すぐ眠る。

今日は夕方から冬らしく寒くなって来た。どうせ一度は来る冬ならば時には寒い方が却って安心だ。

京子、入学願書に添へる写真を撮りにゆく。

一月二十七日(月) 晴

渋谷(庶民金庫)から新宿に出、チヤンポンを食ふ。

牧野書店に牧野氏を訪ひ「螟蛉子」の紙型を渡す。銀座に出る。三味堂で「インドネシアン」(竹井十郎著)、紀伊國屋で大川博士の「亜細亜の建設者」と自著「馬車と口笛」を求める。

文祥堂で原稿紙十帖、伊藤屋でハトロンの封筒を買ふ。ブラジレイロで「馬車と口笛」と「螟蛉子」を包装して松井女史に小包で送る。

ブラジルで一休みして、キューペルに行く。青年座の人々に一席講演するためである。「新体制と演劇人」につき思ひつくまゝを語る。六時過ぎ帰宅。

舟川氏より速達。

一月二十八日(火) 晴

素人劇一篇(講談倶楽部)今明日中に書き上げたいと思ふが、なかなか感興わかず、アヌーブ・シングの「ネール」を読んだり、平戸の姉から送って来た小豆と餅でしるこを拵へて食べたりして時間を過す。京子が帰り、やがて登美子も帰ったので、四時、家を出る。三味堂や紀伊國屋で新刊書を覗き、五時ちょっと前にコロパンの階上に行く。舟川氏とこゝで落合ふ約束なのである。五時半まで自分の方から約束しておいたのだけれども、多分来ないだらうといふやうな気がしたので、国民新劇場に出かける。昔なつかしい築地小劇場が国民新劇場と名を改めてから始めての観劇である。文学座——武者小路実篤の「七福神」と翻訳ものパスツール伝の二本立。後者の方は、評判どほりなかなか面白い。山下与志

一君と落合ひ、銀座裏のみすぢ(すし屋)で、彼の就職と仕事の好評を祝する意味で少し飲む。家に着いたのは十二時近く。舟川氏から速達。

一月二十九日(水) 晴

行きになるかと思はれる空模様だったが、別に降りもせず、正午前後には陽よく射して来た。

園池氏と松井女史より葉書、前者は素人劇手引出版(文化連盟)の件、後者は著書を送ったことに対する例とパスツール夫人劇化の件、どちらもすぐに返事を出す。

今日こそ講談倶楽部の脚本を半分でもと思ったが、やつと書けさうな気になったので、それだけで止して「ネール」を読む。明日から書くつもり。

午睡一時間近く。起き読書。五反田まで散歩「ボンベイの夜」その他を買ふ。白木屋でコーヒーを飲む。

夜、中原啓一君の使(府立第八高を卒業生)が“マテオ・ファルコーネ”の台本と中原純一君からのお菓子を持って来る。

夜も「ネール」を読む。

一月三十日(木) 晴

つまらないことから、この数日、登美子と不和をつづけて今日はそのために登美子は学校も休んだが和解する。おろかな夫婦をくりかへすことも人間の一生であらうか。

昼食をすまして、家を出る。洋子の用器画の道具、伊東屋が定休日なので文祥堂で買ふ。セツトは二十幾円もするので、差替のコンパスだけを買ふ。これだけでも七円九十一銭する。

東日会館一階食堂で舟川氏(落葉書院)と逢ふ。二時間ばかりも話す。それから園池氏と松坂肉の宣伝レストランで文化中央連盟から出す「素人劇演出の手引」のプランを中心に色々話す。

午後五時から蚕糸会館二階に於ける少年文学の会の総会に出席。改組問題で私が意見を述べるや、圧倒的に賛成者が現はれ野口センセイ真赤になってヒステリーを起す。神崎君が之を大唱したりして、なかなか面白かった。帰途、藤浦、神崎の両君に誘はれ銀座裏の酒場ジュネットにハイボールを飲む。帰宅してみると会の帰途、上澤氏が立寄られたとのこと。

一月三十一日(金) 晴

朝、目茶苦茶寒い。正午近くからは正に春のような暖さ…。

朝、登美子を遅刻させることにして、上澤氏を訪ふ。少年文学名作選の編集費配分の件。昨夜の話を中心にして会の将来について語る。

園池氏の依頼による「素人劇演出の手引」のプランを立て、その他の葉書と一

緒に自分で投函する。

午睡でもして、戯曲(講談倶楽部)にかゝらうと思ってゐたが、大島萬世君が来たので、二時間ばかりしやべる。同君のため農村漁村文化協会に紹介状を書き、同君辞去後、京子も帰ったので、銀ブラに出る。「雨ぞ降る」その他を求め、美松でコーヒーを飲んで帰る。留守中に秋永君が訪ねて来たとのこと。

朝、山下秀雄氏(実業之日本社)より手紙。「理恵子の手帖」が遅れてゐることにつき諒解を求める手紙。

昨日より植木屋…垣根の修繕

二月諸事要録

仕事

戯曲「よもぎだんご」『講談倶楽部』	27枚
小説「亜細亜の柱」『子供の科学』	21枚
小説「南方の詩」『令女界』	17枚
計	55枚

収入

戯曲「暖簾を棄てて」『雄弁』	50円
小説「亜細亜の柱」『子供の科学』	72円
戯曲「父の碑」新興キネマ・原作料	200円
小説「南方の詩」『令女界』三月号	40円
戯曲「村の劇場で」『東宝』二月号	12円
計	384円

二月一日(土) 晴

甚だ予期にして一月は仕事らしい仕事も出来ずして過ぎた。毎年正月は成績が悪いから、せめて今月からこそはと思ひながら、既に第一日の今日はとりめもなく半日をボンヤリと送ってしまふ。

午後、洋子たちの展覧会でも見に行かうと思ひ、京子にせき立てられながら支度をしてゐるところに、中原淳一君と啓一君が訪れて来る。近いうちお訪ねしたいといふ手紙は来てゐたが、ちよつと意外であつた。招じ入れて、夕方まで話す。中原君は内山君の仕打に対して、かなり不満を持ってゐるやうだが、同君の話の通りだとすると、内山君も全くひどい男だ。が、それはそれとして、中原君に絵本を書くことをすゝめると、同君も啓一君も元氣になって帰る。

夜、安藤誓君来る。宮下君と三人で飲む。今日は誓君、泊まらないで帰る。

⊗二月二日(日) 晴 ⊙m

まるで春だ。暖い、暖い。

植木屋が残して行った植木で焚火をする。「東宝」二月号着。私の「村の劇場で」や大山君の「螟蛉子」紹介が載ってゐる。三上文子君から兄さんの結婚や先日こちらから言っただったレンズのことについて手紙、大島万世君から僕の紹介により文化協会の方がうまく行ったとの礼状。

午前十時、机につく。やつと「よもぎだんご」(講談倶楽部)の原稿のペンすべり出す。午前中に八枚書く。枚数は超過しさうだが、もう書けることだけは大丈夫書けさうだ。そこで昼食までで今日は仕事を打ち切り、京子をつれて第八高女に展覧会を見に行く。洋子の図画も一点陳列されてゐる。品川に出、兄の家に行くつもりでバスに乗る。そのバスを降りると美知子もそれに乗ってゐたので、京子に届けさせるつもりであった傘を渡し、五反田を経て帰宅。

夜、ラヂオを聞きながら、新聞の切抜を整理する。(印度に関するものだけ)

二月三日(月) 晴

「よもぎだんご」続行。

「昔の仲間」書斎の躍進時代二月号到着。

午後、一睡。久しぶりに洗足駅付近に散歩し、「大亜細亜主義」と汽車の時間表を買って帰る。

今日は節分だが、今年は大豆がなく店でも売ってないので、内でこさへる。

浅野君夫妻来訪。婚姻届の保証人になってくれとの相談、快諾して署名捺印し、「みさの」からずしをと、やつと手に入れた二合の酒で九時まで飲み且つ談ず。同君夫妻辞去後、宮下君と佐世保(金比良町のこと、比良町のこと)の話などして、かなり夜更かしする。

少しばかり残ってゐる酒を飲んで眠る。

洋子、学校を休む。

二月四日(火) 晴

「よもぎだんご」の浄書にかゝる。一気に完成するつもりで、いつもより一時間も早くとりかゝったが午前中で疲れてしまひ、昼食後しばらく眠る。

杉原勇に「螟蛉子」を送る。

所在なさに、庭木の枝を切って消炭を作ったりなどして時を過す。

京子、風邪にて学校を休む。

登美子、渡辺さんの家にお通夜に行く。

二月五日(水) 晴

運動不足を補ひたい気持ちで、庭に焚火などする。それから机につき、「よもぎ

だんご」にかゝる。昨日、半分ばかり清書しかけたが、どうも面白くないので趣向を変へ、書き改める。が、そえも思はしからず、中止して、仕方なく本を読む。「独立前夜の印度」である。

午睡一時間ばかり、再び「独立前夜の印度」を読む。夕食後、一眠りするつもりで穂積から送って来た酒を宮下さんと飲む。眠れず。十時ごろ一人でまた一合余り飲んで眠る。

穂積より酒二本、客車便で送り来る。

穂積より明日発つかも知れぬとの速達。

永井君より内原行に参加するものの氏名を速達で知らせて来る。

二月六日(木) 晴

気分を改めて「よもぎだんご」を書き直すつもりで、机につく。四五枚の草稿が出来たが、どうも面白くない。ペンを投げてしまふ。実に憂鬱である。一体どうしたものであらう。今年になってから、まだ何ひとつ満足な仕事をしてゐない。気分転換のため旅行でもしたいと思ふが…。

×

ばかばかしい位に暖いと思つてゐたら、急に狂気じみた風が吹き出した。

西局で七〇円ひき出す。

堀沢君(講談倶楽部)来訪。前約の催促の上に、更に脚本を依頼さる。

お酒を飲んで昼寝。…今夜書くつもり。

×

穂積から「ケフタテヌ」といふ二度目の電報。

×

夜、風は嘘のやうに屈ぐ。

仕事相変らず出来ぬ。

穂積より今夕着く旨の電報。

園池氏より原稿と雑誌。

二月七日(金) 晴

正にスランプであらう、今日も書けぬ。

京子、今日から学校に行く。が、お昼までで帰ったので、東宝から来た十二円の振替をとり荏原局に行き、帰りに中延駅近くの古本屋で「ケソン伝」を見つけ、買って帰る。何かの手がかりになるかも知れぬ。さうなると掘出物である。

穂積から電報が来てゐる。今夕七時四十五分、東京駅に着くといふのであ

る。洋子と二人、早めに出かける。駅構内の東洋軒で洋子を相手に一ぱい飲む。
洋子は穂積叔父さんに歓迎に意を表するのだとて、花束を買ふ。

穂積を迎へて帰ってみると、安藤君も来てゐる。餅をまた持って来てくれたのである。穂積持参の松坂肉を肴に賑かに飲む。

安藤君、辞去後も世を更かして語る。

二月八日(土) 晴

高田英之助君(新興キネマ)から昨日差出しの速達が今朝配達される。いよいよ「父の碑」映画化決定し、今明日中に原稿料を持参するとのこと。やはり嬉しい。

が、仕事の方は今日も出来ぬ。実に悲しくなる。

夕方、宮下さんに留守を頼み、穂積を案内してみんなで兄の家に行く。兄の方にも分けるつもりで穂積が送ってくれた酒を私の方で飲んでしまったので、その代りで私達の方で兄の家に土産(雑詰類)を買って持参させることにする。

兄の方でも酒が入手出来なかったとのことで、たった二合しかなかったが、それでも兄弟三人、久しぶりに集まって、平戸のこと、親族のこと、色々と思出話を花を咲かせる。

二月九日(日) 晴

渡満義勇軍壮行会参列。

七時半、家を出る。定め八時半に、きちんと上野駅に着く。子供町の永井君その他一人が既に来てゐる。そのうち芦谷光久、原一司、芝義雄の諸君に篠原雅之君まで田村淑君をつれて来てくれる。一行八人だ。賑かに出発。

篠原君「亜細亜の柱」完結と同時に単行本にしたいから、追加の分を今から用意してくれといふ。

見学の後、壮行会に参列。非常に暖いので助かる。

三時十七分の汽車で帰る。

家では穂積も宮下君も夕食をしないで待ってゐたので、早速一ぱい飲むことにする。

中田之雄君(実業之日本社出版部)から、いよいよ「理恵子の手帖」の校正を送る旨の葉書が来てゐる。やっと安心！

二月十日(月) 雪

五時、小用に起きると外は大雪だ。降った、降った、やっと二年ぶりの雪らしい雪だ。ラヂオの放送によると、七寸の積雪とのこと、洋子や京子は勿論のこと、穂積や登美子まで大喜びで雪かきなどする。

宮下氏は今日は海軍省の³から、そのまゝ(正午から)横浜の裁判所に出かける³とて、出てゆく。

登美子は穂積接待の意味で休む。が、その甲斐もなく私の仕事は今日も出来ぬ。全く情ないことだ。午後四時、穂積を案内して銀座に出る。それから国民小劇場に、折よく通りかゝった伊藤寿一君に案内してもらって入る。芸術小劇場の「一切黙霖」だが、なかなか面白い。

帰途、銀座裏の「みすし」で二人で二合飲む。情ないことに二合以上は飲ませてくれないのだ。

二月十一日(火) 晴

昨日の夕方来た「理恵子の手帖」の校正をする。一頁から百四十四頁まで、正午すぎまでかゝってすまし、洋子たちに新橋局から出すやうに言いつけて、持たしてやる。

洋子と京子が案内役で、穂積は日劇かどこか覗かうと出てゆく。

火鉢さへ不要とするやうな暖さだ。

式から帰った登美子は、宮下さんに手つだってもらひながら、縁先で薪や炭をかたづける。私は中田君(実業之日本社)と園池氏に返事を書き、それから寝ころんで「一切黙霖」を読む。

穂積たち、とても満員で入れないからニュース劇場と銀ブラだけして来たとして案外早く(五時頃)帰って来る。

穂積や宮下氏と共にお湯に行き、三人で晩酌をやる。

「理恵子の手帖」の校正

児童劇集の原稿(切抜)を上澤謙二氏に託す(…京子に持参させる。夕方)

○二月十二日(水) 晴

京子の入学願書を洋子に提出させる。

登美子、朝ちちょっと出勤して帰る。今日は穂積が松坂に帰るからである。

十二時には家を出なければならないので、十一時ごろから別杯を汲み交す。穂積が買って来た松坂肉のみそ焼、あんこうのゆびき、まぐろの刺身その他…。肴はたっぷりだが、酒が小さいお銚子に三本しかない。それでも近頃の情勢の中では有難いとしなくてはならぬ。京子も早退して早く帰って来る。赤い顔して外出も出来ないのでは、登美子と京子に穂積を見送らせ、その後しばらく眠る。

穂積が帰って淋しくなる、が、その感傷を圧へて、夜、机につく。出来ない、出来ない。一体どうしたといふのであらうか。私はもう作家として駄目になったのであらうか。

令女界から写真が送って来る。

京子の受験番号は「お39」である。

二月十三日(木) 晴

昨日の午後、堀澤君(講談倶楽部)に今日中に届ける旨の速達を出し、それと行違ひに同君からは督促の速達が来たが、出来さうもないので、今晚徹夜して書くことにきめ、昼間は家の中でボンヤリと暮す。

梅田屋では酒もビールもなく、下の酒屋から、やっとビール二本だけ手に入れ、それを飲んで休職後二時間足らず眠る。お湯に行って、早速仕事にかゝる。久しぶりの徹夜である。明方になって、やっと「よもぎだんご」二十七枚脱稿。

「令女界」三月号着。

二月十四日(金) 晴

久しぶりに徹夜で書き上げた「よもぎだんご」は学校の行きがけに洋子に速達で送らせることにする。

朝食後、就寝。流石にぐっすり眠るには眠ったが二時間ばかりで覚めてしまふ。

高田君(新興キネマ)の来訪を待つともなく待って、何といふことなく一日を送る。

実業之日本社より「理恵子の手帖」の校正残り全部が送って来た。少しずつ校正する。入浴後、全部片付ける。目が疲れてゐるので、見落としも多いことと思ふが、中田君(出版部)に委せることにして打切る。

須長氏(雄弁)から速達。——「暖簾^{マフ}を捨てゝ」を四月号に発表させてくれとの相談。

高田氏(新興キネマ)から明日の昼訪ねる旨の電報。

少女倶楽部三月号着。

二月十五日(土) 晴

「よもぎだんご」を書き上げた勢に乗って、一気に「亜細亜の柱」をやっつけようと思ったが、中々さうは行かない。しかし、徹夜でもなんでもいゝ、こゝで月々の仕事を軌道に乗せておけば一ヶ月半に近いスランプの状態から立ちあがれさうな期がする。是非兩三日中に何とか^{マフ}しよう。さう思ひつゝ、つい仕事を投げて、高田君(新興キネマ)の来訪を待つ。

午後一時頃、高田君ではなくて企画課長の北村六郎氏が自身でやってくる。題名を「母の姿」と改めると、青山三郎氏の^{マフ}看督、平井岐代子の主演その他相談は一決したが、原資料として持って来た小切手が銀行の横線入りなので、受取ら

ず、現金を要求する。

福君清人(福田清人の間違いか―編者)君から誘はれてゐた黒田氏(福日学芸部長)との怪談には三時間近くも遅れて出席。

帰途、牧野書店に寄る。

二月十六日(日) 晴

登美子は日直。午前中、机につく、はかばかしくないので、ブラリと新宿に出かけ、東宝映画劇場で、「蘭印探訪」を見る。八巻の実写だが、中々よい。少しも退屈しない。

思ひがけなくも、こゝで加藤武雄氏に逢ふ。

モナミで一休み。チャンポンで酒二本飲んで帰る。今夜徹夜するつもりで…。

ところが、安藤誓君がやって来たので、おしやべりをしてゐるうちに、つい夜を更かして、そのまゝ眠る。

安藤君も泊って行く。

二月十七日(月) 曇、夜 雨

朝から「亜細亜の柱」にかゝる。

午後、身が入らず、真山青果全集を読む。

夜、一合飲んで宵に眠り、徹夜のつもりで仕事にかゝる。

仕事は物にならなかったが、出来る見透しがついたので、中止して二時近くに床につく。度々小用に起き、四時過ぎまで眠れない。殆ど明方近くになって、やっと一睡。

穂積より葉書、高柳長三氏夫人が急逝されたにつき弔電を打ってくれとのこと、直ちに西局より打電。

オクサマノゴエイミンヲカナシミ、ハルカニアイタウノイヲサゝグ、タガウトラヲ

二月十八日(火) 曇

明方にちよつと眠ったばかりだから、朝食後一休みしてからにしようかとも思ったが、勇気を出して、早速「亜細亜の柱」にかゝる。やっと軌道に乗る。が、夕食時までかゝってやっと脱稿。出来栄は悪くないやうな気がする。しかし、調子さへつけば、二〇枚ぐらゐは半日で楽々と書けた昔のスピードはどうしても出ない。年のせゐであらうか。それはとにかくとして、仕事ひとつ完成した時の気持は、やっぱり嬉しい。疲れてゐるし、子供等は勉強が忙しいといふから、宮下君に速達しに行ってもらふ。大阪松竹の山上君から「螟蛉子」を送ってくれとて金を送って来たので、之も小包で送る。

夜、北村六郎氏(新興キネマ資料課長)来訪。父の碑の原資料金貳百円現金で持って来てくれる。

中野之雄君(実業之日本社出版部)から速達。——「理恵子の手帖」の原稿を借してくれとの相談。

朝、令女界より四〇円送り来る。

二月十九日(水) 雨

たいした雨ではないが、とにかく久しぶりに雨らしい雨が降る。

誠文堂から振替で七拾貳円を送って来たので、それを取りがてら外出することにする。「南方の詩」は今晚徹夜で書くことにしよう。西局で誠文堂の振替を現金にし、貯金をして、宝文館の振替を大森南千束局で現金にし、長原駅から銀座に出る。実業之日本社に中田之雄君を訪ひ、「理恵子の手帖」につき打合せをする。日比谷書房、近藤書店、三昧堂、松屋などで本を買ひ、銀座の郵便局で舟川氏と西沢君にハガキを出し、千疋屋で一休みして帰る。登美子も早く帰る。

登美子が町内の酒屋を回って、奔走してみたが酒もビールもなく、仕方なくブドウ酒を飲んで一睡し、九時から机につく。「南方の詩」を書くつもりだったが、調子が出ず、単行本にする「亜細亜の柱」の原稿(切抜)を整理して休む。

夜に入って、雨いよいよしんねりむつりと降りつゞく。

二月二十日(木) 晴

今日もつひに書けず、早目に家を出る。運動のつもりで五反田まで歩く。大崎広小路の新刊書店で飯塚友一郎氏の新著「国民演劇と農村演劇」を求め新宿に出る。チャンポンを食べ、紀伊國屋で「蘭印現状読本」を求め、エルテルに行く。

五時半から六時半までに舟川氏と逢ふ約束である。なかなか来たらず。

永井君、阿部君、西沢君、大山君の順で来り、以上の顔ぶれで私の出版祝いをしてくれる。一平、花の家、その他一軒、都合三軒で飲む。…一軒ぎりでは酒に制限があって満足出来ないからである。が、私は三軒目で、つひにへたばって先に帰る。電車の中で眠ってしまひ、東京駅で目がさめる。あわてゝそこからひき返す。

北村六郎君(新興キネマ)より「母の姿」撮影開始の通知あり。

二月二十一日(金) 晴、夜は雨

雄弁より五〇円送り来る。

令女界には明日持参する旨の速達を出し、東京駅の庄司で昼食をすまして、新興キネマ撮影所へ出かける。

大泉学園前といふ駅で(武蔵野電車)降りて、タキシー(新興より迎への車)で行く。

北村君の案内で、撮影中の青山三郎^{三ツ}監督を挨拶して、しばらく見学。平井岐代子、美鳩まり以下の俳優諸君と記念撮影。特に宣伝部の希望で岩田芳枝とも写真を取り、北村と三人でお茶を飲む。松崎博臣、小出英男の諸君とも逢ふ。

夕食後一睡して「南方の詩」にかゝる。やっと出来さうな見透し^{ミツ}をつけただけで中止、眠る。

二月二十二日(土) 晴

今日は大島万世君と一緒に産業組合の松井君の案内で神奈川県下に於ける移動演劇隊の実況視察に出かけるつもりであったが、「南方の詩」が出来てゐないので、登美子を休ませて新宿駅まで断はりに行かせる。

しかも「南方の詩」は正午までに、わづかに一枚書けたのみ。泣き出したく狂ひたくなる。

つひにやけ気味になり、昼食に酒を飲んで寝てしまふ。令女買いには登美子に電話で明日までの猶予を求めさせる。

夜、舟橋聖一の「木石」を読んで、多少得るところあり。

美枝さんと香世ちゃんが来て夕飯を食べて帰る。

二月二十三日(日)

記述なし。

二月二十四日(月)

記述なし。

二月二十五日(火) 晴

文筆生活を始めて満十年、今日ほど苦しい思ひをしたことはない。今までのかうした場合のことを振返つてみると、「若草日記」の書き出しの場合の苦しみと思ひ出されるが、それでもその時は何とかやっつける若さと気力と体力があった。だが、今は…。

編集部が困ってゐるだらうことは、よくわかつてゐる。現に一昨日電報をもらひ、昨日こちらから午後一時までに持参すると返電してゐるのだ。

正午近くになって、やっと、実にやっと、やっと！書け出したが、午後四時までにやっと前半だけをすまして、それだけを登美子に持参させる。北村君は気を揉んで、社の外に出て待ってゐたさうである。実にすまない話だ。ひどく疲れてゐるので後半は一眠りをしてから書くつもりだったが、なかなか眠れないで困る。

嫂、来る。

二月二十六日(水) 晴

五時半起床。早速「南方の詩」後半を書く。宮下氏が出勤前に届けてくれると言ったが、どうしてもそれには間に合はず、九時近くに、やっと——とにもかくにも出来あがり、登美子に持参させる。

北村六郎氏(新興キネマ資料課長)から先日の写真(母の姿出演者達と一緒に写ったものと、岩田芳枝と二人写ったもの)送り来る。

顔を剃って、すぐ出かける。渋谷、庶民金庫。明治製菓でコーヒーを飲み、銀座へ出る。更科で昼食をすまし、産業組合開館へ行く。農懇の東浦庄治に物を聞く会。

三時半、東日開館で舟川氏(洛陽書院)と落合ひ、第二戯曲集出版の件につき打合せ、銀座の末広でスキヤキを食ふ。一人に二本づつの酒。…それ以上は絶対に飲ませてくれぬ。

今日は二・二六記念日。…その話が東浦さんとの間にも出る。

二月二十七日(木) 晴

久しぶりに、のんびりと手紙を書く。大部分は久しい間たまってゐた返事である。小林徳次君、山口清君等にも書く。

大槻敬一氏(洛陽書院)に第二義曲集出版の件についての交渉。

今村源三郎氏(偕成社)に原稿(切抜)返却の要求。

北村六郎氏(新興キネマ)に礼状。

十一時、家を出る。新宿でチャンポンを食べ、森永で加藤氏宅への手土産の菓子を買ひ、小田急に乗る。下村千秋氏も同じ車に乗ってゐる。

加藤氏宅に寄り、菓子をとゞけ、同道で柳田国男氏邸に出かける。今日は農懇研究会——柳田氏に民俗学を聞く会である。集まるもの、加藤武雄、下村千秋、中村星湖、和田傳、打木村治、その他十三、四名。散会後は一同で加藤氏邸により、夕飯の御馳走になる。

二月二十八日(金) 雨

朝の郵便を待ってゐるが、中々来ないので、直井氏への用を下の渡辺さんに依頼して、九時四十分家を出る。

義姉に頼んであつらへさせた絹張りの傘をさして出る。非常に軽くて気持がよい。

桜木町で降り、雨の中を伊勢崎町へ行き、野沢屋は休みなので、松屋で三上重夫君(文子君の兄さん)への結婚祝ひに菓子皿(四・六の)を求め三上宅に行く。父君、兄さんのお相手で昼食にビールを御馳走になり、姉さんの家で文子君の昨年の入選作(いちまゝ)を見せてもらって、三時半辞去。東横線で帰る。

長崎茶話会には風邪気味故欠席することにする。

- ◇国民演劇創刊号着
- ◇小佐君より電報(酒の件)
- ◇誠文堂より速達二通。

※二月二十八日の欄には二月二十七日の日記が途中まで書き込まれ、書き損じとして斜線が引かれている。二月二十八日の日記は、空欄(二月二十九日に相当するページ)に書かれている。

三月諸事要録

仕事

小説「亜細亜の柱」『子供の科学』	20枚
戯曲「日本の女、日本の妻」『講談倶楽部』	30枚
小説「南方の詩」『令女界』	20枚
物語劇「国の華」J O A K	20枚
長篇少年小説「スパイ征服」誠文堂	180枚
計	270枚

収入

「南方の詩」宝文館	36円
「亜細亜の柱」誠文堂	63円
「よもぎだんご」講談社	68.75円
「昔の仲間」健康保険協会	78円
計	245.75円

○三月一日(土) 曇

田村君(子供の科学)からメ切を急いでくれといふ哀願同様の手紙が来てゐるし、さうでなくても、こゝで完結させておかないと単行本にする都合もあるからと思って、今日から五月号にかゝらうかと思ったが、うまく調子が乗らずウヤムヤに過す。

「南方の詩」の疲れか、頭痛がし、無暗と眠い。しばらく昼寝をする。

興亜奉公日で宮下氏早く帰る。反対に登美子は、日直で遅い。洋子の料理で夕食。

※以下、三月一日の余白への書き込み。三月二日の追加項目か、三月二日への備忘か。

三月二日、

戯曲集出版の件につき、舟川氏に手紙を書く。

三月二日(日) 雨、夕方より雪

一月二月暖かだったかはり…とでもいふやうに、三月の声を聞くや、逆に寒くなってしまう。今日など特に寒い。おまけに冷たい雨が降ってゐる。その雨の中を九品仏に山下氏を訪ふ。京子の件についてである。来客中なので玄関先で話をして辞去したが、大がい大丈夫だらうと半ば安心をする。

帰ってみると、藤崎二男君が来てゐる。穂積が送ってくれた「あられ」で汁粉をする。頭が痛いので、しばらく昼寝をし、夕方、銭湯で流しをとる。

子供達はお雑煮^{マヅ}とて白酒、大人は酒がないのでブドー酒、宮下氏と二人で二合ばかり飲む。

幸ひ、夜も早く眠れたが、一時すぎに目がさめる。残ってゐる一合のブドー酒を飲んで眠る。

所得税の申告用紙来る。

細井といふ未知の人から、「愛国回覧板」と「先駆者の父母」をやらしてくれとの手紙。

三月三日(月) 晴

夜来の雪は止んだが、はっきりしない天気だ。

「亜細亜の柱」を完結させるつもりで机につく。頭痛は幸ひすっかりよくなったやうだが、どうも、書かんとする意力が足りない。こんなことではいけないと思ひながら、つい、うかうかと正午になってしまう。

三時、家を出づ。不^フ二屋で福田清人君のためにチョコレートを買ひ、ブラジルでコーヒーを飲んで、新橋演舞場に出かける。前進座の招待日である。真山青果の「忠臣蔵」だけを見、大島万世君と茶を飲み、そのまゝ東京駅に行く。福田君が今夜九時三十五分、満洲へ出発するのである。見送りには外に近藤春雄、新田潤、荒木巍の諸君が来てゐる。右の連中とスシを食って別れ帰宅。…つまらないことから登美子と激しく争ふ。

三月四日(火) 晴

登美子、昨日の争ひから休んでしまふ。

十時半、家を出る。レインボウグリルで軽い朝食をとり、文化中央連盟の「素人劇講座」の執筆者協議会に出席。出席者は飯塚友一郎、園池公功、北村喜八、伊藤熹朔、田郷虎雄、大島万世、木村(放送局)の七人、連盟側から松本学氏外数名。こゝで昼食の御馳走になり協議をすまして、園池、大島の両氏とともに銀座に出る。千疋屋、銀座に新開店の美松等で二時間以上おしやべりをして散会。私は園池氏から回してもらった招待券で有楽座を覗く。水谷八重子一座に山口俊雄以下の井上道場の人々、之に岡譲二を加へた一座。北條秀司作、衣笠貞之助演出

の「機場」二幕五場だけを見て出る。ビヤホールでビール一杯、新橋で酒一本を飲んで帰り、すぐ眠る。

三月五日(水) 晴

こゝ数日はっきりしない天気がつゞいたが、今日は申分ないお天気。

ラヂオ体操をしてすぐ机につく。「亜細亜の柱」四五枚書き、面白くないので中止。洋子が早く帰ったので一時間ばかり午睡をして、久しぶりで洗足駅の近くに散歩に出る。

夜、ラヂオを聞いたり、たまってゐる新聞を読んだりして何といふことなしに時間をつぶす。

お天気の良いとは反対に、ひどく頭のぼけた一日である。

河出書房から思ひ出したかのやうに「猪之吉」の原稿が書留で送って来た。

三月六日(木) 晴

地久節、よいお天気である。

登美子と京子は休み、洋子は式だけ。宮下君だけが出かける。

午前中、机につく。「亜細亜の柱」である。登美子と京子、美枝さんのお産の前に遊びに行くとして出かける。

洋子と昼食をすまし、文芸開館における少年文学の買いに出席するために出かける。ブラジルでコーヒーを飲み、築地映画劇場の受付でプログラムをもらって見る。ちゃんと「母の姿」の予告が出てゐる。尾張町からバスに乗って虎の門で下車。

少年文学の会は相変らずつまらない。もう止めてもいいゝ時だ。

夜、所得A税の申告書の下書をする。登美子は時評願と履歴書を書く。

小佐君からの酒、なかなか来ない。

ビールを一本飲んで寝る。

近藤君から電報…開拓浪曲に原作を貸してくれとの件(電話)

三月七日(金) 雨

夜の四時に目がさめる。かういふ半端な時間が一番困る。

明日から京子の試験だから、二人で八幡さまに参拝する。

朝食後、ちよっとうとうとして、すぐ「亜細亜の柱」にかゝる。正午までで止め、昼食後、洋子も早く帰ったのでちよっと午睡をする。

×

明日から京子の入学試験である。入浴させて、早く休ませる。

酒は手に入らず、ビールを飲んで眠る。

文化中央連盟から原稿紙と雑誌が送って来た。

三月八日(土) 晴

今日から京子の入学試験である。今日は幸ひ天気もよい。登美子が付き添って出かける。

「亜細亜の柱」を書く。正午までに、あと一三枚といふところまで漕ぎつける。

京子の試験、今日は身体検査だけだったとのことで、午後早く帰って来る。

「亜細亜の柱」は、すぐ六月号書くために必要なもので、未完成のまま、それを持って誠文堂に篠原君を訪ふ。同君に写真を撮ってもらひ、近くの喫茶店で打合せをする。「亜細亜の柱」は八月乃至十月位までつゞけることにし、その代り「薔薇の街」を少年向に改めて、それを早急に出版しようといふことになる。喜んで帰る。銀座に出、原稿紙を買って帰る。

夜、安藤誓君来訪。宮下君と三人で日本酒四合を飲み、安藤君も泊ってゆく。

三月九日(日) 晴

京子(入学試験)今日は休み。

さっそく「亜細亜の柱」に着手。昨日大体は出来てゐたのだが書き直す。

正午ちょっと過ぎに完成。洋子に速達させにやる。

洋子、京子、宮下君安藤君洗足池に散歩に出かけ、種物など買って来て庭に農業をはじめる。

すっかり春らしい暖さ。

堀沢君(講談倶楽部)から「よもぎだんご」(素人劇)に対する感謝と同時にもう一篇前に頼まれてゐた脚本を是非書いてほしいと言って来たので、それを考へる。…どうも一晩では出来さうもない。

午後四時頃、安藤君帰る。

×

明日からまた愈々忙しくなる。が、本がもう一冊出るので嬉しい。しっかりやろう。

三月十日(月) 晴

今日で京子の試験も終了である。起きぬけに京子と二人で八幡宮に詣でる。

試験には洋子がついて行く。

木炭がなくなったので庭に薪を燃して消炭を作り、それから机につく。「南方の詩」を書くつもりだったが、調子が出ないので、講談倶楽部の脚本のテーマを考へる。どうしても名案がなければ、感激美談集の鈴木稲子女史のことを劇化することにして今日は中止する。

京子帰る。口頭試問は造作なかったさうだが、体操の三段跳びが出来なかつ

たといふ。大丈夫だらうとは思ふが、ちよと気になる。

入浴。誠文堂から出す書きおろし長篇少年小説の構想などを考へながら早く休む。が、眠れないので登美子が、ひそかに用意してゐてくれた酒を一合余り飲んで眠る。

東宝三月号と山上貞一氏の葉書。

三月十一日(火) 雨

晴れては降り、降っては止み、まるで五月雨のやうな一日だ。…

講談倶楽部と躍進時代から稿料が送って来る。両方で百六十四円七十五銭也。躍進時代の方は振替なので京子をとりにやる。

講談倶楽部の脚本を書く。どうやら明日までには出来さうだ。

正午ちょっと前に家を出て、丸の内の三和銀行に小切手を落しにゆく。伊東屋で原稿紙を買ふ。

○泰・仏印の調停なる。

○松岡外相渡独のニュース。

いづれも国民として何かなし明るい心がする。

三月十二日(水) 天候の記載なし。

小佐君より碧海(酒)四本送り来る。

三月十三日(木) 曇、夜一雨

朝早くから講談倶楽部六月号の素人劇脚本を書く。八時から夕方の六時まで頑張りつゝけて、とうとう「日本の女、日本の妻」三〇枚を脱稿。

予て山上貞一君より用談もあるからとて、松竹家庭劇の招待が来てゐたので、登美子を先にやり、私は原稿完成の上に出かける。新橋郵便局で速達で送る。この頃より雨が降り出し、東劇につく頃には本降りになる。「月下氷犬」といふのの第二場が開いたばかりのところ、それが終わってから山上氏と逢ふ。この劇団のために脚本を提供してくれるやうにとの依頼を受ける。今書き上げたばかりの「日本の女、日本の妻」を提供する約束をするにはしたが、山上君の大阪流には少々あきれる。四番目の「戦へる母」だけを見て登美子と共に帰る。

途中、更科でソバを食べて帰る。

⊗三月十四日(金) 雨

今度といふ今度、令女界の原稿を遅らさないやうにしようと思ひ、机につく。

京子の府立第八入学合格の通知状到着。さっそく登美子が松本先生に報告に行き、そのまゝ今日は出勤する。

幼年クラブの高村君、写真物語に子供町の人に出演してもらひたいとて、その相談に来る。永井君に電話で来てもら打合せをする。

同君等辞去後、お酒を一合飲んで午睡。

登美子が帰って、兄の家より招待を受けた旨をつたへる。出先から真直ぐに行くことにして、伊東屋に原稿紙を買ひに行く。同じく私の依頼で原稿紙を買ひに来た宮下君と一緒にたつたので、お茶を一緒に飲み、自分の分ももって帰ってもらふ。

兄の家で御馳走になって帰る。

留守中に安藤君が炭を持って来てくれてゐた。

三月十五日(土) 晴

「南方の詩」を断念して、五反田に出る。今日から「母の姿」が封切されるからそれを覗くつもりで、五反田まで歩いたが、そこではやってゐないので、つひに築地映画劇場で見る。演出も脚色も演技も悪くはないのだが、何分にも短い。短篇映画といふものに自分は、ある期待を持ってゐるのだが、果たして「母の姿」が短篇としていゝものかどうか自分にはわからない。

更科に寄り、すぐ帰宅。

小佐君より送られた南方の銘酒一碧海で、先日「螟蛉子」の出版祝賀会をやってくれた人々を招待する。

大山功、西沢揚太郎、永井鱗太郎の諸君、これに宮下、安藤の内輪の二人を加へて、六人で十二時まで飲む。殆ど三升を飲み尽し、大山君さんざん酔っぱらって、西沢に介抱されながら帰る。

安藤君、泊ってゆく。

三月十六日(日) 晴

南方の詩、南方の詩、何と書けない南方の詩よ！

宮下、安藤両君、洋子京子をつれて「母の姿」を見に出かける。

昨日の酒のせゐか、ふらふらと眠い。

ホンのしばらくうとうとする。

午後二時、予て約束しておいた小林徳次郎、畠中貞夫、三階秀郎の三君来訪。往年の聖坂の少年達である。聖坂で別れてまさに十余年ぶりである。夕方まで話して帰る。

夕食の時、碧海の残りを飲んで一睡し、「南方の詩」を書くために起きる。が、けっきょく書けないで止める。

…眠ってゐる間に阿部君が来訪した由。美枝夫人女子安産。

三月十七日(月) 晴

「南方の詩」の草稿を少しくして家を出る。日比谷の郵便局で、北村君(令女界)

と森下君(農懇)に速達を出し、美松で一休みして、早速情報局に行く。移動演劇に関する官民懇談会である。出席者は情報局側は第五部長以下数人、官庁並に公共団体側は内務省、文部省、大政翼賛会、産業組合、青年団、産報、協調会、個人としては飯塚友一郎、大島万世、田郷虎雄の三人。二時から五時まで。

散会后、園池、大島の両氏と友に遠藤君に案内されて大政翼賛会(もと東京会館)に寄り、それから四人でお茶を飲み、三笠で夕飯を食べる。遠藤君と別れてから三人だけで例により、千疋屋で苆を食べて別れる。

今日は朝から心臓が悪い。酒も頼んで早めに床につく。幸ひ、らくに眠れた。

○三月十八日(火) 雨

今日は農民文学懇話会で有馬伯爵を招いて昼食を共にすることになってゐたが、私は昨日、森下君に速達でことはつてゐたので、朝から机につき「南方の詩」を書く。午後二時頃までに半分だけ出来たので、それを持って北村君(宝文館)を訪れる。ひどい風で傘がさゝれない位である。

北村君、松久君と逢ひ、次回完結篇につき打合せて銀座に回って帰る。

風が強くて傘がさせないので、更科だけですまして、地下鉄で新橋に行き、かき鍋二折を買って帰る。

暮方やっと雨も止んだので、宮下君や登美子とお湯に行く。今夜も自重して酒を飲まずに寝る。一時近くまで眠れない。

三月十九日(水) 晴

「南方の詩」第五回分の後半の稿を急ぐ。十二時ちよっと過ぎやっと脱稿、自分で持参する。北村君に手渡しして、それから東洋キネマに行く。「母の姿」を見、篠原君に贈る入場券三枚を求め、三省堂で原稿紙を買ひ、小川町の郵便局から篠原君に速達を出す。

今日は昨日と打って変った上天気。毛糸を脱ぎ、スプリングコートを着て出て来たが、それでも暖すぎる位だ。バスで新橋に出、木村でコーヒーを飲んで帰る。

登美子は同学年の同僚が送別会を開いてくれるとかで朝から出かけて夜九時頃帰る。夕飯は洋子の料理である。

三月二十日(木) 晴

放送台本「国の華」に着手。なにしろ、ストオリーも何も前もって考へてはゐなかったのが骨が折れる。それに数日「南方の詩」で苦勞したためか疲れ気味でうまく行かぬ。

午後四時までに欲しいといふ速達だったので、三時頃、出来てゐる分(四分の一)だけを持って放送局に行き、金谷君に逢ふ。演出の戌井君にも紹介してもら

ひ二十二日の朝までに届ける旨を約して、五反田に出る。白木屋で登美子を待つ。「母の姿」を見るためである。白木屋の食堂で偶然、長崎時代の後輩谷川君平山君に逢ふ。登美子が来たので、五反田劇場に行き「母の姿」を見る。これも偶然ながら兄や美知子も見に来て、帰る。五反田の渋谷食堂でさゝやかに生ビールで祝杯をあげる。兄の案内で「白百合」といふ喫茶店でお茶を飲んで別れる。

屋台店のおでん屋でおでんを食べ、その高いのに呆れて帰る。

子供の科学から校正刷り送り来る。

三月二十一日(金) 晴

春季皇霊祭。

すばらしき上天気、暖く羽織も何も脱ぎ捨ててしまふ。

「国の華」の材料を得るために、京子をつれて銀座に書物を探しに行く。京子は佐世保の祖父より入学祝ひに送って来た記念品代で辞書を求め、自分も数冊の本を買ひ、伊東屋の地階の千疋屋と新橋の明治製菓で一休みして帰る。

執筆は夜分からはじめることにして専ら読書。

宮下君は海軍省のピンポン会、洋子京子は美知子の家に出かける。

夕食の折、ブドー酒とビールを飲んで一休みし、十時から再び読書、十一時から執筆にかゝる、が、疲れて一時過ぎに床に入る。

明日は又々冒険だ。

○三月二十二日(土) 晴、夜 雨

七時起床。朝食後直ちに「国の華」に着手。十二時過ぎ、どうなりかうなり枚数だけ充たして、とりあへず登美子に持参させ、自分も後から出かける。金谷君も浅井君も食事に出てゐて、ゐないので原稿をおいて、登美子とレインボーグリラで昼食をすまし、銀ブラをして帰る。

近藤書店で「吉野朝の悲歌」を買ふ。

帰宅後、下の古本屋に「国史美談」の代を払ひ、洋子と京子のために共用の書架(二十三円)を求めて与へる。二人大喜びで書物の整理をなす。

明日から愈々誠文堂から出す本の原稿にとりかゝるのだと思ふと何かなし嬉しい。夜は久しぶりで、のんびりとラヂオなど聞く。

身体は然し、ひどく疲れをおぼえる。

三月二十三日(日) 雨

日曜だが、いつもより、むしろ、早く起きる。宮下君は善道ちゃんのために明治神宮参拝。(善道ちゃんは目下佐世保で中学の受験中)私は京子をつれて八幡さまより御礼詣り。

朝食後さっそく仕事にかゝる。

今日からいよいよ誠文堂から出す長篇に着手。書き出しは例のとほり、かんたんに行かず、わづかに三枚書いたにすぎないが、しかし、その三枚は割にスムーズに後がつきさうな調子で出来たので幸先よしと喜ぶ。

午後と夜分、前保養の意味でラヂオを聞いて過す。夜は鈴本(上の)からの寄席中継。

加藤武雄氏から羅振玉の拓本を送ってもらったので礼状を出す。

明石精一氏への返事。

誠文堂から六十三円今日送り来る。

三月二十四日(月) 朝と晩…雨、昼間…晴

誠文堂から出す長篇、やつと今日から調子が出る。健康は上等は言へず、少し頭痛がしたり、軽い悪寒がしたりするが、仕事は思ひの外、快く振興し、午前、午後、夜、ずっと書きつゝける。今日だけで二十五枚書く。

但、夜分眠れないのには困った。夜中の三時過ぎにやっと眠る。明日から当分酒を用ひる外はあるまい。

中田之雄君(実業之日本社出版部)より速達

出版届

検印願…初版は五千部に決定

篠原雅之君(誠文堂)より速達

“薔薇の街”を四月中に発売したいから原稿を至急送ってくれとの相談。

いま書いてゐるのは、どうしても今月一杯はかゝるので、“帰れ白鳩”を送ることにしようと思へる。

本日、流しをとる。

三月二十五日(火) 晴 非常に寒い、実業之日本社より検印用紙送り来る。

京子の卒業式である。

まづ中野之雄君に速達(出版届)之は宮下君に出してもらふ。

篠原雅之君に返事の速達。“帰れ白鳩”の切抜も同時に送る。今朝、宝文館から稿料が来たので、その受取方、登美子を出しにやる。

京子の卒業式に臨席。来賓は例年になく少く、区長代理、関根、小見、田郷の四人のみ。…京子がこの学校(旗台)の一年生に入学する時に、この荏原に越して来たのだが、早いものでその子が今日は卒業である。校長、小笠原、松本の諸先生に厚く礼を述べて帰る。

実業之日本社に中田氏を訪れ、検印のこと印税のこと打合せる。

偕成社に原稿を返してもらひに行く。西田氏不在、水島良雄氏に要件を依頼して帰る。

誠文堂に篠原君を訪ひ、出版の件につき打合せをする。

嫂と美知子来る。

登美子、松本先生のところに挨拶に行く。

三月二十六日(水) 晴

昨日は一昨夜の不眠のため無駄にしてしまったので、今日は精をださなければならぬ。

けっきょく、20枚書く。

検印五千枚、登美子に持たせて実業之日本社にとゞけさせる。

午後、偕成社の西田利明君来訪、かなり長く話して帰る。

夜は酒で眠る。

京子、午前中、洋子につれられて学校に教科書を買ひにゆく。

三月二十七日(木) 晴 風強し

終日、誠文堂から出す本の原稿を書く。午前、午後、夜、つゞけて書く。三十一枚出来る。

午後二時ごろ出来た分を登美子と京子に誠文堂に持たせてやる。

今日は催眠剤で眠る。

三月二十八日(金) 晴

洋子は京子に教科書買ひ、京子は美知子の家に遊びにゆく。

午前中は大変スムーズに仕事はかどおり、一章分(二〇枚余)を書きあげる。

昼食後ホンのちょっと一眠りして、午後も少しく書く。

四時、家を出る。日比谷郵便局で篠原君に原稿を送り、放送局に行く。宮下君とその友人二人(海軍省の人)が放送局の見学を希望してゐるので、その案内がてら、自分の作「国の華」の放送を聞くためである。洋子京子も来る。

帰り宮下君の御馳走で月ヶ瀬でアンミツを食べ、新橋で一ぱい飲んで帰る。

今日も催眠剤を飲んで眠る。

高村君(幼年倶楽部)から礼状。一先日永井君を紹介してやったからである。

西田利明君(偕成社)から礼状と、書籍二冊(日本国史美談)送り来る。

松井きつ女史より演出依頼の手紙。

近藤春雄君より速達。

安藤氏より京子に入学祝ひの座机送り来る。

三月二十九日(土) 雨

小英雄『二五枚』(二十八日分)を誠文堂へ登美子に持参させる。

本日は二十二枚書く。

午後四時、家を出づ、日比谷公会堂に行く。——大陸開拓文芸懇話会主催の文芸浪曲の会、岸田国土氏開会の辞を述ぶ。

右に二時間ばかりみて、文芸会館に出かける。——農民文学懇話会演劇部会。出席者、園池、大島、田郷、古川良範の四人。八時半散会。

真直ぐに帰る。

安藤誓君が来てゐる。

三人(宮下)で一ぱい飲んで眠る。

「理恵子の手帖」今月あたり見本が出来て来るだらうと心待ちにしてゐたが、来なかった。

三月三十日(日) 晴

八時前から仕事にかゝる。

子供等が安藤、宮下の大人連とトランプ遊びなどやって、騒ぐので、仕事のはかどりが遅々としてゐたが、結局、全体としての出来は案外によく「小英雄」本日分の出来は(三〇・五)で今までのうちでは最も好成績である。

安藤君今日も泊ってゆく。

夕食にブドー酒を飲む。

三月三十一日(月) 晴

「小英雄」昨日の分(三〇・五枚)を誠文堂へ洋子と京子に持参させる。

本日の出来は第七章「写真機と古靴」二八枚である。

四月諸事要録

仕事

小説「歌ふ間諜」誠文堂(書き下し長篇)	262枚
小説「亜細亜の柱」『子供の科学』	21.5枚
講座「公共劇講座」文化中央連盟	26.5枚
評論「素人劇について」都新聞	2枚
小説「南方の詩」『令女界』	21枚
計	330枚

収入

小説「亜細亜の柱」『子供の科学』	60円
小説「南方の詩」『令女界』	40円
物語劇「国の華」JOAK	60円

小説「理恵子の手帖」印税 実業之日本社	750円
計	910円

○四月一日(火) 晴

「小英雄」昨日の分(二八枚)を誠文堂へ洋子、京子に持参せしむる。

今日は昨夜の不眠のため成績わるく午後二時余り寝て、四時頃から十一時まで書く。一之は質的にも量的にも成績よく第八章「出来上あがった一枚の写真」(三三枚)の出来、今までの中で一番の成績。

夜中の三時に酒を飲んで寝る。

四月二日(水) 晴

「小英雄」第八章「出来あがった一枚の写真」(三三枚)を誠文堂へ洋子、京子に持参させる。

実業之日本社より「理恵子の手帖」の初版印税七五〇円送り来る。第十五銀行京橋支店払ひの小切手、登美子を同伴して受取に行く。

直ちに蚕糸開会に行く。女子科学塾生のため自作(木枯)とモルナアルの「二人の話」の舞台稽古を見てやる。とうとう午後の公演までみて舞台^{マツ}看^ミ督も見てやる。

三味堂で「ビルマ興亡詩」を買ひ、明治製菓でコーヒーを飲んで帰る。

酒井松男君(日本の風俗)より速達、原稿の督促である。

※「催眠剤を飲んで」が打ち消されている。

四月三日(木) 天候記載なし。

書下し長篇(誠文堂)今日は十九枚を書く。

第九章めぐりあひ(428-465)

四月四日(金) 天候記載なし。

書下ろし長篇(誠文堂)第一〇章「不思議な音楽帳」を書く。

四月五日(土) 天候記載なし。

書き下し長篇(誠文堂)昨日の分は出来が悪いので今日やり直す。

第十章「不思議な音楽帳」二七枚

466-519

四月六日(日) 雨

書き下し長篇(誠文堂)本日は成績よく三〇枚を一気に書く。

第十一章音楽帳奪はる

520－580

四月七日(月) 天候記載なし。

書下し長篇(誠文堂)昨日も順調だったが、今日は更によく三三枚を書く。

第十二章 小堀典太の出現

581－646

四月八日(火) 晴

書下し長篇(誠文堂)

第十三章 青空学校(二一枚)

647－688

待ちに待った「理恵子の手帖」の見本出来て来る。装幀なかなかよろし。

今夜大九郎君盛岡に帰る。宮下君上野駅まで送って行ってくれる。

夜、篠原君来訪。…書下し長篇についての打合せである。二人でブドー酒を飲む。

四月九日(水) 天候記載なし。

書下し長篇(誠文堂)

第十四章 魔を呼ぶ歌

四月十日(木) 天候記載なし。

書下し長篇(誠文堂)昨日は余りよくなく、今日と二日分で次の成績。

第十四章 魔を呼ぶ歌(二五枚)

689－737

責任問題

恐るべき国際間諜団

虎ヒゲ兵曹長あらはる。

あばかれた音楽帳の謎

だが、その音楽帳は…?

四月十一日(金) 天候記載なし。

書下し長篇(誠文堂)いよいよ大詰に近づき、今日は成績大いによろし。

第十五章 解決へ一歩前進(三三枚)

738－803

最初の冒険

色々の調査と準備

電信柱のやうな男

回々教徒の家

四月十二日(土) 薄曇り

誠文堂より出す書きおろし長篇少年読物愈々本日完成だ。朝七時より始めて午後二時に終了、全部で四百四十三枚、千t月二十三日に着手してから二十一日、三週間かゝつたわけである。十日間で完成の予定だったのだからその倍を要したわけだが、途中で書けなかった日が三日ばかりあった外、毎日順調に進んだ。まづ、一応の成績といふべきであらう。

自分で持参する。丁度、途中で篠原氏に逢ったので、同道で誠文堂に行き、それからコーヒーの御馳走になりながら色々打合せをし、校正五台分をもらって帰る。

夜、子供たちは宮下さんと荏原劇場に「みかへりの塔」を見に行く。

魚夏の取次電話で安藤誓さんがやって来るといふ。やがてスタンドを持って来てくれる。

登美子が外交手腕をふるって手に入れて来たビール三本を三人で飲んで寝る。

書き下し長篇(誠文堂)の校正五台分

四月十三日(日) 午前 曇、午後より夜にかけて雨

やっと誠文堂から出す書き下し長篇の仕事は終わったが、あとには「亜細亜の柱」『文化中央連盟の公共劇講座』『南方の詩』が残ってゐる。さっそく「亜細亜の柱」にかゝつたが、どうしても疲れのため書けない。

昼寝三時間余り。

夜「亜細亜の柱」二、三枚書く、明日かんたんに書けさうだからブドー酒を飲んで休む。

○篠原、園池、大島、西田、内山の五氏に「理恵子の手帖」を送る。

○篠原氏に校正を速達

四月十四日(月) 曇

「亜細亜の柱」(二一・五)午後一時頃脱稿、登美子に持参させる。

昼寝一久しぶりで洗足駅付近まで散歩し、洋子の「三国誌」卷四と「東洋の満月」を求め、コーヒーを飲んで帰る。

夜、公共劇講座の資料として博洋堂から四五冊ホンを買って帰る。

○中田之雄氏、西田利明氏、北村六郎氏にそれぞれ礼状を出す。

○北村六郎、青山三良、岩田芳枝三氏に「理恵子の手帖」を送る。

四月十五日(火) 晴

今日は公共劇の講座のメ切日だが、連日の疲れで書けさうにもない。あっさ

り猶予の葉書を書き自分で荏原局に出しに行く。帰り古本屋で甲斐史蹟その他を買って帰る。

昼寝一時間以上。

四時頃、家を出る。三味堂で「蘭印生活二十年」を買ひ、コロンバンでコーヒーをノンで、マーブルに行く。大陸開拓文芸懇話会の総会である。出席者中々多し。新会員の広津和郎氏なども来る。

満鉄の招聘により「慰安列車」のルポルタージュを引受けないかと近藤君より話あり、承諾する。

猶、国民文学コンクール執筆者を抽選で定めることになり、自分も当る。

帰り、近藤、大石の諸君とお茶を飲んで別れる。

放送局より六〇円、登美子受取りに行く。

四月十六日(水) 晴

公共劇講座「題材について」半分以上書いたが、ひどく疲れたので中止する。

昼寝三時間近くもして、多少元気が出たので、文化中央連盟に池谷君を訪ひ、明日まで待ってもらふことにする。

それから銀座に出、「新亜細亜」四月号を求め、資生堂でクリームソーダ、ブラジルでコーヒーを飲んで帰る。

お湯で流しをとる。

近くの古本屋で「日本神話と伝説」を求める。夜はそれと「アイヌの伝説」を読む。大いに役だしさうだ。

四月十七日(木) 晴

公共劇講座の分担二講の中「出来の題材について」十七枚脱稿。それだけを持って文化中央連盟に行き、池谷君に渡す。

日比谷の「カテイ」で登美子と落合ひ、有楽座に行く。もと抗日第八路軍の人々であった興亜新劇団の試演会の招待である。大島万世夫妻、中野実、福田清人、大隈俊雄その他の諸君と逢ふ。

演目の三つ「軍器不当」「病院夜曲」「毛先生」の三つ、どれも面白い。感心する。

満洲にかぶって行ったソフトを洗濯に出す。篠原君より速達一その後の新興ぶりを報告してくれ、序文二枚すぐ送るやうにとの手紙。

興亜新劇団試演会

宝文館より稿料送り来る。

四月十八日(金) 曇、時々小雨

公共講座分担二講中「公演前後の注意、特に公演終了後の態度について」九枚半を正午近くに脱稿。文化中央連盟に持参する。池谷君がゐないので女の人に預け、新橋駅近くの食堂でランチで昼食をすまして帰る。帰途荏原中延駅近くの書店で飯塚市の「歌舞伎劇概論」(金六円也)を買って帰る。

「誠文堂」から出す長篇の校正と序文を書いて自分で速達を出しに行く。

帰りに前田家具店より書棚を買ふ。

高村氏(幼年倶楽部)先日永井君たちを紹介してやった御礼と原稿の依頼に来る。

○四月十九日(土) 晴 ☉n

「南方の詩」のために机につく。頑張れば出来ないことはなささうだったが、怠けることに胆を決め「歌ふ問諜」の校正を届けに誠文堂へ出かける。篠原君不在のため、受付子に預け、文房堂で原稿紙を求めて新宿に出る。

チヤンポンを食べて帰る。

夜、隣組常会で今日は家が当番、七時開会、隣の樋口老人を先頭に話だし夫妻、永田夫人、藤井夫人たち集まる。とり止めもない話で散会。

安藤誓君来駕、宮下君を加へ、三人で日本酒二合とブドー酒三合を飲む。明日用があるとして誓君今日は泊らないで帰る。

◎ 新宿(エルテルの筋向ふ)で求める。

四月二十日(日) 晴

二十二日が大掃除の検査日だが、宮下氏が今日やるといふので、自分も「南方の詩」を止めて大掃除に一日を潰す。本の整理が大変だ。

この家に越して以来の大きかりの掃除をする。荒い仕事は全部宮下氏がやってくれたのだけれども、それでも夕方はいへいへに疲れ、下の湯で流しをとる。

青山三郎氏より手紙「理恵子の手帖」に対する礼状。

四月二十一日(月) 晴、夜一雨

昨日の疲れが今日まで抜けぬ。

朝、ブドー酒を飲んで眠る。昼食後も亦、眠る。

洗足駅近くまで散歩、帰ってみると裁判に行った宮下氏が帰ってゐたのでその話を聞いてゐるうちに夜になったので、けっきょく今日はウヤムヤの一日だったといふことになる。

が、今日は「南方の詩」を河出書房に交渉しようといふ決意を固めた日である。

国民演劇より座談会の招待。

都新聞より原稿依頼。

二月二十二日(火) 曇、時々小雨

北村氏(令女界)篠原氏(誠文堂)(※「校正—最後の分」との横書きあり)に新橋局より速達、三昧堂で「南海諸島の神話と伝説」を求め、コロンバンでコーヒーをノンで、牧野書店に行く。

午前十一時から国民演劇主催の農村劇に関する座談会。

出席者一園池、田郷、亀屋原、大島、羽田。

散会后、亀屋原、大島の両君と共に秋多雨雀氏夫人の告別式に行き焼香。

その帰途、三人で目白駅近くの東京パンで駄弁を弄して時間を潰し、一人銀座に出る。三昧堂で「南洋興亡史」を求めブラジルで時間を潰して第一ホテルに出かける。

女子科学塾の招待—晩餐会。

遠山、田郷、橋本。

留守中北村六郎、西沢遼君来訪せる由。

日本学芸新聞より原稿依頼。

岩田芳枝、近藤春雄君等より手紙。

⊗四月二十三日(水) 曇

「南方の詩」完結篇、やっと腹案は出来たが、書く気がせず、北村君に明日まで待ってもらふことにし、自分で本局に速達を出しに行く。帰途、大盛堂で満洲の伝説に関する本を買って帰る。なかなか面白し。

昼食にうどんを食ひ、昼寝をする。久しぶりに昼に遊ぶ。

「南洋興亡史」を読む。昨日買った本は二冊とも読む値打が十分にある。

堀沢^{マコ}正三ろう君来訪。三度目の原稿に関する件、忌々しいが争っても仕方がないから承知する。要するに勝つことだ、この秋を期して！

放送局より速達—原稿の依頼である。承知の旨自分で返事を出しに行く。

四月二十四日(木) 晴

「南方の詩」今日はどうあっても書き上げるつもりで二度目の速達を昨日出しておいただが、—筋も出来てゐるのに、どうしても調子が乗らない。心臓も昨日以来少し変だ。重苦しい。ずるずるに書くことを断念して「南洋興亡史」を読む。

西田利明君(偕成社)来訪。書下し偉人伝中「源頼朝」を引受けてくれないかとの相談、「南方の詩」を書き下して河出に交渉するつもりであったが、つひに引受

けてしまふ。

登美子に卵を探させ、卵の油をつくらせる。心臓の薬である。

今日は一切酒なしで眠る。但、十二時近くまで眠れず。登美子に白髪を抜いてもらふ。

四月二十五日(金) 晴

憂鬱々々、々々だ！

今日も「南方の詩」は出来なかった。

午睡一時間。

散歩(洗足駅付近まで)コーヒーを飲み「印度の聖者サンダーシング」「義経記」「源義経」を買って帰る。

後藤勇氏の「南洋興亡史」を読む。夜までかゝって読了。実によい本だ。中等学校上級以上の青年男女には皆読ませたい本だ。

○四月二十六日(土) 晴

何といふことだ。「南方の詩」つひに今日もかけぬ。

泣きたい程の気持だが、あきらめて中止して都新聞の注文による「素人劇について」二枚を書き、運動がてら自分で届けに行く。

銀座の三書店で源頼朝に関する図書数冊を求める。

宮下君は先輩に誘はれて夕飯を共にするから遅くなる旨の速達をよこす。

心待ちにしてゐた安藤君も来ないので、三日ぶりでビールを飲む。

令女界には登美子に電話をかけさせる。北村君ひどく困ってゐる様子だったといふ。すまぬ、すまぬ。

四月二十七日(日) 晴

「南方の詩」今日も駄目。

文筆生活に入って満十年、こんなに困ったことはない。——そのくせ、自分では今年になって、文学的に少し成長したといふ気がする。

青山三郎氏、岩田芳枝君、北村六郎氏(すべて新興キネマの人)にそれぞれ返事を書き、来る三十日午後六時、銀座千疋屋で落合ひたい旨の案内を出す。

夜起きて書くつもりで昼食の時宮下君と一本づつ飲んで、昼寝をする。登美子の教へ子遊びに来る。

安藤君来る。宮下君や洋子も加へ四人で洗足駅まで散歩し、夜も飲む。度胸を据えて、夜中に起きることにし、ブドー酒を飲んで眠る。

四月二十八日(月) 曇

夜中の三時に目がさめたが、どうにも眠くてもう一度眠る。五時半に起き、

八幡さまに参拝して、きっかり七時から仕事をはじめる。

「南方の詩」完結篇二十一枚、やっと午後一時過ぎに脱稿す。あゝあ！

すぐ自分で持参する。北村君等は既に校正に出張中ださうで、受付子に預けて帰る。

岸田国土氏母堂の告別式に行くつもりだったが、もう時間がないので、日比谷から弔電を打つ。

夜は、父の命日なので、留守番役を宮下君に頼み、一家で兄の家に行く。子供二人は学校から、まつすぐに行く。

四月二十九日(火) 雨

登美子に「スパイ征服」の検印を捺させる。五千枚だから楽でない。

平塚橋の印屋に検印用の認印二個、住所氏名のスタンプ、を注文し、朱肉を買って帰る。みんなで六円八十銭もとられる。

河出孝雄氏(河出書房)に「南方の詩」出版につき相談の手紙を出す。同時に「理恵子の手帖」を贈る。

誠文堂からスパイ征服の検印用紙五千枚分と、出版届送り来る。

四月三十日(水) 晴、一時小雨

荏原町駅近くの書店から鈴木舜一氏の「勤労青少年の文化と教育」を買って来て読む。なかなか得るところが多い。

北村六郎君(新興キネマ)来訪。今晚の会合についての打合せ旁々遊びに来たのである。長いこと話しこんで、正午近くに帰る。

夜、千疋屋で青山三郎氏と落合ひ、北村君も来たので三人で飲む。平井岐代子君、岩田芳枝嬢は撮影のため来られないとのことなので、三人だけで飲んだわけだが、二度目のところでビールとウキスキーをチャンポンにやったために大いに酔ひ、電車の中で北村君の厄介になる。

宮下氏に誠文堂へ検印五千部分と出版届二通を届けてもらふ。

学芸新聞より速達。

五月諸事要録

仕事

評論「勤労青少年と文学について」『日本学芸新聞』 4枚

ラヂオドラマ「祖母の心」JOAK 30枚

小説「亜細亜の柱」『子供の科学』七月 21枚

小説「亜細亜の柱」『子供の科学』八月	21枚
伝記「ナポレオン」	20枚
計	96枚
収入	
小説「亜細亜の柱」『子供の科学』	60円
小説「南方の詩」『令女界』	40円
随筆「まづ指導者を！」『都新聞』	5円
単行本『スパイ征服』印税五千部分	750円
計	855円

○五月一日(木) 晴

誠文堂に「スパイ征服」の印税を受取に行く。篠原君に逢ひ、出版契約書を交換し、印税七百五十円小切手で受取る。旅籠町の第百銀行支店で現金に換え、上野の日本美術協会展に行き、三上文子君の入選作を見る。

銀座に出て、伊東屋で書類入れのカバン、近藤書店で書物三冊を買ひ、更科でそばを食ふ。銀座の郵便局五百二十円貯金し、明治でコーヒーをノンで帰る。

昼、遊ぶ。

午睡。

北村六郎君を訪ふ。歯医者に行ったとて不在、母堂にカプセルと昨日借りたハンカチを託し、帰る。佐山さんで自分の足袋四足求め、タバコでコーヒーをノンで帰る。

京子の誕生日なのでゴシをおごる。

夜、安藤君遊びに来る。

放送局より資料速達で送り来る。

五月二日(金) 晴

鈴木舜一氏の「勤労青少年の文化と教育」を読む。なかなか得るところが多い。

五月三日(土) 晴

「勤労青少年と文学について」を書き、霞ヶ関ビルの日本学芸新聞社に届ける。

銀座に出、都新聞から来た五円の稿料を貯金に入れ、近藤書店に行く。「馬賊を語る」「北満のカザツク」などを買ふ。

伊東屋で、この前沢山買った書きやすい原稿紙が来てゐたので千枚求める。更科で「そば」明治製菓でコーヒーを飲んで帰る。

安藤君来る。宮下君と三人でお湯に行き、三人で一ぱい飲む。

明日この二人に兄、阿部君で、私のために厄よけ祝ひをしてくれるので、その打合せなどして寝る。

高村君(幼年倶楽部)より速達。

五月四日(日) 雨

ひどい雨風だ。今日は私の厄よけ祈願に兄、阿部、宮下、安藤の諸君と共に川崎大師に詣でる予定であったが、とても出かけられさうにもないので、正午まで家の中でゴロゴロしてゐて二時近くに登美子、宮下、安藤の諸君とともに家を出る。…この時分には嘘のやうに天気はよくなつてゐた。洋子京子は旗台の同窓会に出席し、そこから直接に出かけることにし、大人四人で白木屋でコーヒを飲んで、それから出かける。

家の一家に兄の一家、阿部君一家、それに宮下、安藤の両君を加へた大一座で私のための祝宴が開かれる。大いに飲み、大いに食つて、例のごと眠ってしまう。九時頃、帰途についたが途中で便通を催し、一人さきに帰ってしまう。

岩田芳枝その他から手紙。

今日は酒の配給あり(一升二合)

五月五日(月) 晴

夜中の一時に目がさめてしまひ、三時まで吉川英治の「源頼朝」を読み、それから配給の酒——但、合成酒の三樂である——を一本半飲んで眠る。

八時頃さめる、みんなはとっくに出て行つてしまつてゐる。

登美子が掃除をする間、散歩のつもりで千北君の家に行つたが、幾ら呼んでも誰も出て来ないので帰る。

今日は是非「亜細^{アジヤ}の柱」を書くつもりだったが、宿酔の気味で書けない。潔く今日一日休養することにし、林房雄の「東洋の満月」を読む。

美枝さんと香世子ちゃん遊びに来る。

端午の節句なので、宮下君と一杯飲んで寝る。

長原の本屋で「イヴン・サウド」と「今日の印度」を求める。

金比良町より手紙。

五月六日(火) 晴

正午から伊藤熹^キ朔氏の出版記念会があるので、午前十一時半、家を出て感情であるレインボーグリルに行く。亀屋原、園池、岩谷三一の諸氏に逢ふ。

散会后、日本演劇協会の入会金並に三ヶ月分の会ヒを園池氏に託し、亀屋原君と銀座に出る。岡田禎子、三好一晃氏と逢つたので、コーヒを飲んで暫く話をする。岡田氏「南方の詩」を傑作と褒める。

神田に行き、大同館で「右大將頼朝伝」を求めて帰る。

帰宅して、それを読んでみると、北村六郎君(新興キネマ)がやって来たので、暫く喋る。——おみやげにお菓子をもらふ。

夜、お酒一合あまりを飲んで寝る。

五月七日(水) 晴

二日無駄にしたので今日こそ「亜細亜の柱」をと思って机についたが、どうしてもうまく行かないので、いさゝかやけ気味で昼食に一本つけて飲む。そして一時間余り寝て、平塚まで散歩がてら印をとりに行き、古本屋など

ひやかして帰る。まるで夏のやうに暑く気分が悪くなる。

寝ころんで「馬賊と語る」を読んでみると、兄がやって来る。転任問題についての相談である。夕飯に一本つけて出す。但、時分は胃の具合が悪いので飲まない。

西田君(偕成社)から速達二通。「源頼朝」を見合せて「ナポレオン」にしてはどうだらうとの相談。そこで下の古本屋から「プルターク英雄伝」六円を買って来る。

登美子に互助会より四四円二十九銭送り来る。

五月八日(木) 晴

放送局文芸部より速達。ラヂオドラマの原稿の催促。そこで「亜細亜の柱」をあとまはしにしてラヂオドラマにかゝることにし、放送局と西田君に速達を出す。終日、テーマはストーリーを考へながら、放送局より送って来てゐる材料を読む。

美枝さんと香世ちゃん来る。

今日も午睡一時間。

午後散歩。夕食前に植木の植変へをやる。久しぶりの労働で、夕飯も中々おいしい。

五月九日(金) 晴

今日送ると昨日速達で約束したラヂオドラマ、全然調子が乗らず、午前中はブラブラと過す。

登美子にニラを入れたオカユをつくらせて、早目に昼食をすまし家を出る。神田に回つて三省堂でプーリエンヌの「奈翁実伝」を買ひ、理研科学映画株式会社に行く。大政翼賛会文化部と同映画と農民文学懇話会との懇談会である。文化映画数種を見せてもらひ、帰りに大島万世君とコーヒーを飲んで帰る。

近藤春雄君より満洲行の件、決定したる旨の速達。

安藤君来訪。夕飯を食べて帰る。

五月十日(土) 午前 小雨、午後 曇

ラジオドラマは止むなく肚を決めて講談倶楽部に発表した「算術の宿題」をラジオドラマ風^{ラジオ}に書き直すことにし、午後三時頃届ける旨の電報を打つ。

嫂、兄の手紙(転任の件)を持って来る。

午後二時家を出て、放送局文芸部の五十嵐君に原稿を渡す。帰途、満鉄に近藤浩君を訪ふ。不在。

中年田さんに寄り、国民服とレインコートを注文する。日数がないので、イヤといふのを口説き落す。一旦帰って夕食後内金六十円を京子と二人で渡しに行く。

五月十一日(日) 晴

鹿谷氏を訪問、桜雲会の寺山君と落合ひ、思ひ出話などする。兄の家に寄る、不在、阿部君の言えでそばの御馳走になる。

午後二時から日本演劇協会の移動演劇に関する特別委員会なので、文芸会館に行く、園池氏等も出席、遠山氏を議長にして協議。

散会後、四谷に近藤君を訪ふ。渡満のことにつき色々打合せ同君の近著二冊もらって帰る。

安藤君が来てをり、宮下君と二人で開墾事業に着手してゐる。

兄が来たので、小石川の話をし、みんなと一緒に飲む。

⊗五月十二日(月) 晴

午前十一時、満鉄東京支社に近藤浩君を訪ひ、課長の粕谷氏をも加へて、渡満の件につき打合せる。出発を一週間延期させてもらふつもりで出かけたのだが、厚生列車開通の日どりの都合で、是非二十六日までに奉天についてもらひたいとのこと、仕方がないので、飛行機の座席が手に入れば、二十四、五日に発つことにし、さもなくば二十二日に肚をきめる。

満鉄本社から上京中の大連満鉄本社の園田定行氏、鉄路総局の佐藤真美氏等とともに落合ひ、佐藤氏とは奉天まで同道しようなどと話し合ふ。

宮下さんに自分が旅行不在になるにつき、別居してくれるやう相談をする。

五月十三日(火) 雨

「亜細亜の柱」執筆。

登美子に貯金をおろさせ、中年田さんに出発が早くなった故なるべく間に合わせてくれるやうに頼み、内金を更に四十円渡させる。

五月十四日(水) 晴

「亜細亜の柱」執筆、午前十時脱稿、直ちに持参、篠原君がゐないので田村君に渡し、旅行のことにつき相談をしてゐるところに、篠原君も来て「スパイ征服」

の見本を見せてくれる。

日比谷の大日本航空会社に二十四日奉天行の座席がないかを訊ねたところ、意外にもあるといふので、もし天気が悪いと、汽車で行くのもウンと遅くなるから色々迷ったが、思ひきって予約する。東京―米子―京城―奉天で金百四十九円也。早速満鉄に行き近藤君に報告、近藤君より本社へもし同日航空欠行の場合は、十日ばかりおくれる旨の電報を打ってもらふ。

夜、宮下君安藤君と同道で帰って来る。下宿の件についての話。

飛行機に生れて始めて乗るのだと思ふと、意気地のない話だが、胸が少からずドキドキする。

五月十五日(木) 晴

明方の三時すぎまで眠れなかったので、一日もうらうとしてゐる。

美枝さんと香世子ちゃんが来る。先日頼んでゐた麻の洋服があるとのことなので早速注文することにする。

「亜細亜の柱」八月号分を書く。

令女界が例月よりまる二日おくれて、やつと今日出る。「南方の詩」がおくれたためではないかと思ふ。実に申し訳ないことをしたものである。

寝しなに一合飲む。

五月十六日(金) 晴、本夕「祖母の心」放送

「亜細亜の柱」八月号分二十一枚脱稿。

金谷君より二十八日放送の「日本海大海戦」の台本依頼の速達。断はることにし、返事を宮下氏に届けてもらふ。

園池氏より午後三時、情報局にて逢ひたしとの電報。日比谷局で「亜細亜の柱」を速達し、情報局を訪ふ。移動演劇脚本の依頼、移動演劇連盟事ム局長などの話が出る、Aワンで、園池、千賀、大島、田郷四人会談。…この店で売ってゐる白系ロシア人の物売から四円五十銭の安全剃刀と六円の刃を買ふ。

東日会館の文祥堂売店で、万年ペン、シャープペンシル、ノートその他を買ふ。

宮下氏より下宿を写る話が出る。芝によい場所が見つかったとのこと。

洋服屋(阿部君の紹介)が留守中に来たとのこと。

○五月十七日(土) 雨

新聞社への通信一渡満につき。

満鉄(芝田、千田両氏宛)―航空郵便で挨拶並にホテルの世話を頼む。

名刺三種の注文 アドレスの整理 登美子にやらせる。

ついでに押入れ(書庫)や本箱の整理をなし、ナポレオンに関する嘗ての記録や年表を出し、ブーリエンスのナポレオン伝を読む。

阿部君が紹介してくれた洋服や寸法をとりに来る。二十三日までに間に合せてくれるとのこと。

靴はまだ出来てゐないとのこと。

西田利明君(偕成社)より十九日来訪の旨の速達。

国民演劇五月号、子供の科学六月号着。

隣組常会、和田氏宅にて、登美子出席。

五月十八日(日) 小雨

洋子をつれて旗ヶ岡八幡宮と明治神宮に詣で、厄除けと満洲旅行の無事ならんことを祈願する。

地下鉄で銀座に出、松屋と伊藤屋で買物をする。国民帽、筆入れ、靴下、化粧袋など。

明治製菓でコーヒーを飲んで帰る。

午後、散歩がてら、大崎広小路の書店に行き、自著「スパイ征服」を買って帰る。

阿部君の紹介による洋服屋仮縫に来る。

安藤氏、兄一家、阿部氏一家の順で集り、小宴を張る。角力見物に行つてゐた宮下氏も歸つて来、顔ぶれみんな揃ひ、安藤技師の手で記念撮影をする。

九時過ぎ、兄一家阿部氏一家帰る。

五月十九日(月) 晴

今日から「ナポレオン」にかゝる。但、今日は準備だけで終る。

午後、予告どほり西田君(偕成社)来り「ナポレオン」を是非六月五日までに欲しいとねだられる。契約書を交換し、ひきあげる。

宮下さん明日より下宿住居をするとて、運送屋に荷物運搬の交渉に行く。

篠原君より電報——明朝九時に電話してくれといふ文面。

山田産に種痘に出かけたが、留守だったので明日行くことにする。

○五月二十日(火) 晴

「ナポレオン」にかゝる。

二三枚書いてゐるうちに九時になったので、篠原君に電話をかける。「スパイ
征服」が出来たから送らうと思ふが、出発前にとどかないと困るからどうしよう
かとの用談。それで夕方持ってきてもらふことにする。

山田さんに行き、種痘をすます。

嫂来る。

しばらく昼寝をする。

けっきょく今日は三枚書いただけで終る。

気ばかり焦って何にも手につかない。

夕食後、篠原君来訪。二人で一杯やる。

五月二十一日(水) 晴

「ナポレオン」を始から書き直し、けっきょく四枚書く。

福田君からの葉書により、満洲移住協会に出かける。

福田君、近藤君で僕のために送別午餐会を催してくれる。四谷の三河屋。

銀座に回り、近藤君とそこで別れ、明治製菓でコーヒーを飲んで帰る。

西田君から「ゴシンコウイカガ、フシテコフオタスケヲ…」との電報。

二十四日の朝は飛行機で出かけるといふのに、あゝあ、困ったものだ。

五月二十二日(木) 晴

相川貞雄(長崎)より速達、金の融通を求めて来る。登美子に貯金を下させ、金
百円電報為替で送らせる。

「ナポレオン」にかゝる、調子は漸く本式に軌道に乗ったが、何をいふにも日
が足りない。

昼食後、ちょっと寝て午後もかゝる。但、これは身が入らない。

阿部君の紹介による洋服屋、夏服をとゞけに来る。悪いところをやり直させ
ることに残金四十円を渡す。

数日来、右の奥歯が調子が悪いので大事をとって夏目さんに行き、旅行中に
必要なトンプクを五服もらって来る。

五月二十三日(金) 晴

朝から「ナポレオン」を書く。

登美子は郵便局から中年田氏(国民服)に周り、朝から準備に奔走する。おかげ

で洋服も靴も出来て来る。靴は今時めづらしい上等の革の靴だ。

まづ嫂が来る。兄が来る。美枝夫人母子来る。

これらの送別の挨拶の人にまちって偕成社の西田君は原稿の催促にやって来る。

阿部、安藤、宮下の諸氏来り、阿部君の紹介による洋服屋も来る。

され顔ぶれもそろったので、再度の渡満壮行会を挙げる。

今は明日の天気を祈るばかりだ。

兄一家は泊る。

五月二十四日(土) 晴、夜は雨

いよいよ出発の朝だ。神仏を祈って家を出る。兄と登美子と洋子が送って来る。

日航の日比谷営業所から羽田飛行場までバスで送られ、いよいよ六時機上の人となる。

詳しくは別記。

米子で、その先が航空不能となり米子市外皆生温泉の東光園ホテルに投宿。

夜は雨となり、それも刻一刻ひどくなるので、すっかりユーウツになり酒をあふる。

五月二十五日(日) 晴

誕生日！

四十回目の誕生日を飛行機の上で迎える。大いに愉快なり。

奉天着。

満鉄弘報課の北尾虎男氏に迎へられ、日満ホテルに投宿。

北尾氏と明日の打合せをした後、一人春日町まで夕食がてら散歩に出る。

詳しくは別記。

五月二十六日(月) 晴、時々夕立のやうな雨 奉天

北尾氏に迎へられ、同道で鉄道総局に出向き、千田万三氏に会見。打合せをする。

六月九日から厚生列車に乗込むことにし、それまでハルピンで「ナポレオン」を書くことになる。

日満ホテルに更に一泊。

詳しくは別記。

五月二十七日(火) 晴 時々夕立、奉天→哈爾濱

二十三時二十三分奉天発の急行で哈爾濱に向ふ。

詳細別記。

五月二十八日(水) 晴 ハルピン

九時六分、哈爾浜着。

詳しくは別記。

五月二十九日(木) 晴

哈爾浜——満鉄厚生会館。

詳細は別記。

五月三十日(金) 晴

哈爾浜——厚生会館。

エミルスにて喫茶。

夜はローザにて一休み。

詳細は別記。

五月三十一日(土) 雨

哈爾浜——厚生会館。

丸商に出かける。

詳細は別記。

六月諸事要録

仕事

伝記「ナポレオン」	100枚
-----------	------

計	100枚
---	------

収入

ラヂオドラマ「祖母の心」JOAK	96円
------------------	-----

小説「亜細亜の柱」『子供の科学』	63円
------------------	-----

満鉄からの旅費	500円
---------	------

計	659円
---	------

六月一日(日) 曇、時々小雨

哈爾浜——厚生会館。

夜中の一時に目がさめて眠れず、用意のウキスキーを飲む。

朝食はニューハルビンのグルル^{ママ}でとる。

詳しくは別記。

六月二日(月) 晴

哈爾浜——厚生会館。

「ナポレオン」を書く。

午後、キタイスカヤ街に間宮茂輔氏を訪ふ。

夕、ライラツクの花を買って帰る。その花を少し封筒に入れて洋子や美知子に送る。

夜ウオツカ少量を飲んで寝る。

詳細は別記。

六月三日(火) 午後小雨

哈爾浜——厚生会館。

「ナポレオン」を書く。

午後、哈鉄に川瀬氏を訪ふ。丁度その時、奉天の鉄道総局から電話がかかり、厚生船のコースや日程が変わったから、その打合せのため、わざわざ北尾氏が出て来るとのこと。

早目に二階ホールの食堂で夕食をすまし、その間に雨も止んだので、キタイスカヤ街に出かける。

ウオツカー一本もってローザに行く。

詳細は別記。

六月四日(水) 終日小雨

哈爾浜——厚生会館。

「ナポレオン」を止めて、登美子に手紙を書きかけてみると、北尾氏が見えた。

コースについての打合せ。

午後、江運局に北尾氏同道、西山氏を訪ひ、色々と打合せをする。

松花江にボートを浮べる。

詳細は別記。

六月五日(木) 終日小雨

哈爾浜——厚生会館。

北尾氏とニューハルビンで朝食。

北尾氏に日程を拵へてもらひ、帰路も空路によることに決定。

マルスで昼食。

午後、北尾氏と別れる。

昨日、松花江で風邪をひいたらしく気分よくなし。

早目に寝たが、夜中に目がさめて、昨日チューリンで買ったブドー酒を飲む。

詳細別記。

六月六日(金) 晴

哈爾浜——厚生会館。

六月七日(土) 快晴

哈爾浜——厚生会館。

哈爾浜義勇隊訓練所訪問。

詳細は別記。

六月八日(日) 快晴

哈爾浜——厚生会館。

風邪気味。朝寝。

ニューハルビンで朝食。

ビクトリヤで夕食、ローザで二時間ばかり。

詳細は別記。

六月九日(月) 朝 雨、後よくなる。

哈爾浜——厚生会館。但、この夜、ハルピンを立てて黒河に向ふ。

夜、江運局の西山君の招待で、ヨットクラブで夕食。

二十三時発の黒河行に乗る。

厚生船第三コースの代表となる黒沢氏や総務長の山本氏と同車。

詳細は別記。

六月十日(火) 晴 黒河

昼間は終日車中。

延着十五分、二〇時三〇分黒河着。

厚生船大興丸に荷物をおき、黒沢氏山本氏とともに午城丸で一夜を明かす。

詳細別記。

六月十一日(水) 晴

厚生船——黒河。

夜、黒河を出帆。

朝、黒河埠頭事務所訪問。

船内で新田乗組員の挨拶、私も鉄道総局弘報課招聘の添乗者として挨拶をする。

詳細別記。

六月十二日(木) 快晴

厚生船——白石摺子。

詳細別記。

六月十三日(金) 快晴

厚生船。
三道卡。
詳細別記。

六月十四日(土) 曇、時々雨

厚生船。
終日航北。
夕、呼瑪に着く。
詳細は別記。

六月十五日(日) 晴

厚生船。
呼瑪—金山鎮。
記事多し。詳細は別記「当時のノート」にあり。

六月十六日(月) 快晴

厚生船。
金山鎮滞在。
天気はよいが、その代り甚だ暑い。
詳細は別記(当時のノート)。

六月十七日(火) 快晴

厚生船。
終日航江——鷗浦へ向ふ。
この日、記すべきこと多し。
但、詳細は別記。

六月十八日(水) 曇、涼し

厚生船。
八時四十分鷗浦着。
愛路行進^{マラソン}の参加する。
船が出る時、江岸の二青年(日本人)雨の中に踊る。
夜、ボーイに酒をつけさせて、廉売で買ったイワシの罐詰で飲む。
家の夢をみる。
詳細は別記。

六月十九日(木) 曇、午後晴る、終日涼し

厚生船。

予定外の寄西肯に船をつけ開催。
以後、終日航江。
薪積みのため靖安站到寄る。
記念のため白樺でステツキをつくる。
詳細は別記。

六月二十日(金) 雨

厚生船。
開庫康一〇〇倫(判読不能)
詳細は別記。

六月二十一日(土) 時々雨

厚生船。
額穆爾。
詳細は別記。

六月二十二日(日) 晴

厚生船。
終日航江。
夕、つひに漠河に着く。
漠河、漠河！
詳細は別記。

六月二十三日(月) 晴、稍暑し。

厚生船。
終日漠河。
夕方、漠河を出帆。こゝに第三コースの予定全部を終り、黒龍江を下る。
詳細は別記。

六月二十四日(火) 晴、稍暑し。

厚生船。
終日航江。
詳細は別記。

六月二十五日(水) 時々雨、風あり、涼し

厚生船。
航江—金山鎮—湖通鎮。
詳細は別記。

六月二十六日(木) 午前雨、午後晴

厚生船。

数日航江(三道卡—白石摺子)

詳細は別記。

六月二十七日(金) 晴

厚生船。

張地営子—黒河。

詳細は別記。

六月二十八日(土) 晴、暑い

厚生船を下り、今日より厚生列車に移る。

厚生列車。

愛琿。

詳細は別記。

六月二十九日(日) 晴、少し暑い

厚生列車。

愛琿—神武屯—黄金子—黒河。

詳細は別記。

六月三十日(月) 晴

厚生列車。

山神府(建設線)。

詳細は別記。

参考資料

その1 田郷虎雄「厚生列車寸描」(初出・発表年不明)

五十日程満州に行っていたが、この日数の四分の三を、私は船と車の上で過ごした。満鉄の招聘で、厚生列車並びに厚生船に乗り、その実況を観察するというのが、こんどの旅行の目的だったからである。

厚生列車というのは、昨年までは慰安列車の名で、満州の人々にしたしまれて来ていたもので、満鉄がもう十数年来ずっと続けて来ている厚生事業の一つである。その目的とするところは一口に言えば沿線住民の福利民福を計ることにあるわけだが、満州という国の特殊性から見て、また、今日の成長発展に到る迄

に満州国が経てきた幾つかの変遷や段階から推して、厚生列車の目的はその焦点の置き所が、時の情勢とによって、自ずから複雑を持ち、右に挙げた表面的な目的の外に、むしろ、それが主だともいふべき大きな使命が含まれて来る訳である。

が、現段階における厚生列車なり厚生船の目的を挙げて見ると、交通の便も甚だしく悪く物資の入手も極めて不自由な、山間僻地や国境地帯で、酷寒酷暑と戦いながら、満州国治安の為に、産業開発の為に、更に民族協和の実践の為に、挺身しつつあるところの、軍警(軍隊や警察隊)、満鉄社員と、その家族、愛護村民、その他一般沿線(或いは沿岸)住民に対してこれを慰安して、各自の使命に意義を感じしめ勇気づける。手輕に物資を供給する。医療の求めに応じ、医薬を施す。鉄路(水路)愛護の精神を普及徹底せしめる。民族の協和を計る。時局の認識を深め国民精神を高揚せしめる。その他、その時その所の実情に応じて、山林愛護、貯蓄奨励、禁煙奨励、衛生思想の普及等々の教化運動。

大体こういう事になるだろうと思うが、これら一般住民が教育の程度の極めて低い満人や特有のスラブ魂から抜けきれないエミグランド(白系ロシア人)や、その他雑多の民族に依って構成されており、それらの中にあって指導的立場に立つ日本人の数が、未だ十分であるとは言えない現状の中に於いて、この厚生運動の意義は、我が同胞には恐らく推察に難くないところであろうと思う。厚生列車の組織は、乗組員について記すと、一人の総務長の下に、総務班、庶務班、医療班、即売班、演芸班、愛路班、食料班、の七班で組織され、総務長の上に一人の代表が任命される。厚生船には(列車の場合もその線の状況によって)この他に若干の警備隊(軍)が乗る。乗組員の総数は百数十人に達し、日満人の総数は日人一に対して満人三の割合である。列車は、機関車、発電車一・二輛の貨物の他に治療車、娯楽車、食堂車、調理車(食堂貨物を含む)各一輛、即売車二輛、寝台車四輛の十二輛を連結している。

医療班は、医師、薬剤師、産婆、看護婦、事務員、総て一名づつ。

娯楽班は、日人演芸班と満人演芸班の二組あり、今年の日人演芸班は、列車の方も浅草の人々であった。船の方は曲芸を主にして、それに女の子三人の舞踊と、他に落語を加えていた。列車の方、大宮舞踊劇団属(浅草)の人々で、舞踊と漫才。舞踊には極めて簡単な、いわば寸劇的な舞踊劇を加えていたが、これはすこぶる好評のようであった。…近く黒河省では、省主催の厚生船を運行するそうで、そこには演劇班を加え、本年は向う(満州)の共同劇団が乗り、この方面に於ける演劇の効用を積極的に取り入れると聞いたが、満鉄の場合は未だ其処までは現在行っていない。しかし、厚生列車に於ける厚生運動も今年あたりを境にして、既に第一段階の使命は十分に全うしているので、来るべき新発足に際しては、積

極的な移動演劇の活用の外に、紙芝居、影絵芝居、人形劇等の採用が意図されており、私も又力説してきた。

即売班に、班長以下若干の日人の外は大部分は満人で、七班の中で、この班が人数が最も多い。この班の首脳部は皆満鉄生計組合の社員であって、ここで即売される物資も皆生計組合の供給であるが、それに満州国も政府によって統制されている関係上、仕入れの自由がないため、満鉄社員が受くべき物資をこの運動の為に回している訳だが、列車なり船なりに積まれている物資は日常雑貨、衣裳類、食料品、その他特別に大きな家具類は別として、殆ど各般の品物が用意されている。即売は無論、車内(即売車)で行われるが、一部分の品は車外の駅構内で行われる。

厚生列車(船)の到着(入港)の予定日時は、関係筋を通して予め知らされており、且つ、部落のあちこちには、愛路、防共、民族協和等の標語を入れたポスターが貼られていて、予め住民にも判っている訳だ。

で、五色旗の色に染められた派手な厚生列車が

曙匂う大陸に 平和の鐘を鳴らしつつ 久遠の楽土築くべき

希望に燃ゆる大理想 成る日はやがて近からむ……

というような、レコードによる大合唱をかき鳴らしながら、また、乗組員が列車の窓という窓から顔を出し、日満の小旗を打ち振りながら、派手にプラットフォームに滑り込むと、近所近在の部落民がぞろぞろと西から東から北から南からと駅を目掛けて集まってくる。

愛護村民や小学生達は我々と同じく小旗を打ち振って歓迎してくれる。

こうした緊張の機会を逸すると言う法はない。満人芸人による楽隊が直ちに予め設けられている舞台——それは鉄道の枕木を積み重ねた露天の舞台——に上がって、楽器を叩き、愛路の旗を振って、愛路の歌か、その他その場の空気に相応しい歌を高らかに歌いだす。その歌に和して民衆が歌ってくれるならば、その村の治安と建設は輝かしく進展しつつあると見ていい。この間に娯楽班員は露天の舞台に幔幕を張りめぐらし、日満の大旗を立て、演台を運び、拡声器のコードを張りめぐらす。芸人も自分で衣裳小道具を抱えて、忽ちにして出来上がった急製の楽屋に楽屋入りする。

余興の前に代表が演台に立ち、前に挙げたような目的に沿うところの挨拶をする。続いて愛路班長が愛路の演説を行う。ともに極めて短く、且つ、その内容は具体的でなければならぬ。「皆さん貯蓄しましょう。そもそも今や世界の情勢は…」そのような深遠なる演説は豚も喰わぬ、具体的に具体的に、その方法を！彼らに必要なのは方法論である。

演説が終わる。余興に代わる。余興の演芸は、そこに集まった住民の顔ぶれ

によって臨機にプログラムが決定される。この臨機応変の処置が極めて重要なのだ。融通無蓋でなくてはならぬ。が、一言にして言えば、満人が多い場合は満人芸人が中心となって、日人芸人は、お付き合いに彩りを添える程度でよい。日本人が多い場合は、無論、その逆になる

エミグラントの多い特殊の地方では、その為の曲目を考えなければならぬ。雨天の場合は列車の娯楽車の中で行われる。娯楽車には見物の為に、十二枚の畳が敷いてあり、九尺に六尺の舞台が付いている。——ここを演芸に使はなくてもよい時は、開催中その部落民に開放する為の、レコード、碁、将棋、コリンドゲーム、その他が用意されてある。

また、その他に軍隊がいたり、開拓地や義勇隊があつたり、或いは、その他でも日人が特に多ければ、別の方法で日人だけの演芸も行なはれる。余興が終わるころ、即売車の扉が開き、施療車では愛路や民族協和のスローガン入りの診療券と引換えに施療と施薬が始まる。施療と施薬は無料であるが、時間の制限がある為に、夜に入ってから開拓地あたりから懇願されて、班員が出向くこともある。産婆が開拓地で一夜に七人か八人のお産の世話をしたことが、私の添乗中にもあった。

即売や施療が行われている間にも、列車に備えつけてあるレコードが、拡声器を通して都から運んできた新しい歌のうち、健康なものや、マンザイや、落語や…そのようなものが、次々にかけられる。住民はオリンピックが出来そうに広い駅構内の地べたに腰を下ろして、それを聞く。このレコード・コンサートの曲目も、無論聴衆の顔ぶれによって適宜に選択されねばならぬ。日人向き、満人向き、ロシヤ人向き…軍人向き、開拓団向き、義勇隊向き……。

夜は(多くの場合)駅構内の露天で映画が始まる。北満の夏は昼が長く夜が短い。所によっては、二十四時近くになっても真っ暗にならず、しかも、二時頃には早くも白みかけるところがある。所謂白夜の、そうした特別の所は別にしても、多くのところが九時を過ぎなければ、映画が始められない。従って、映画の終わるのは十二時を過ぎることが多く時としては夜中の一時を過ぎることもあるが、見物の殆ど大部分が最後まで飽きることも無く見ている。

スクリーンの上に蔭進してくる列車を見て、うあつと逃げ出した満人部落があつたというのも、つい一・二年前の話だ。乗組員の食事に差し使わないかぎり食堂車も開放される。これはその地の日本人にもっとも喜ばれる事の一つだ。それは丁度曠野のただ中に突如として都会風のレストランや喫茶店が出現したようなもので、彼らは着飾った妻や子供と共に来て、お茶を飲み、食事をする。

予定の開催が終わると、厚生列車は、レコードの蛍の光を響かせ、乗組員は旗を振って次の開催地へ向かって行く。部落民も又、迎えた時よりは遙に真実味

を込めて、旗を振り万歳を唱えながらこれを見送る。

子供らの顔には言いようのない淋しさが漂っている。そして彼らは来年の今頃には又来るであろうこの列車を想像して、それまでの長い月日を数えて見るのだ。

その2 田郷虎雄「厚生列車添乗日記(抄)」(初出・発表年不明)

六月二十八日

第三コース(黒河―漠河)ここに終了、いよいよ今日から第四コースに入る。で、私は予定の如くここで厚生船を降りる。三週間すっかりお馴染みになった厚生船よ、さようなら。アムール河よ、さようなら。…という訳で、篠原愛路係長、蘇武庶務班長、その他の人々に送られて、十時四十分黒河発。

駅員太田氏の計らいで、コンパクトになっている気持ちのよい一室を取ってもらい、今朝まで第三コースの厚生船代表であった黒沢さん、同じく総務長であった山本さん、唯一の添乗員であった私、三人同室で、曖昧まで乗る、が、三人共流石に疲れ甚だしく、殆ど口をきかない。殊に、明け方の二時に目がさめて、そのまま眠っていない私は、シートにころがるが早いのか、ぐっすりと阿呆のように寝込んでしまった。

十二時、曖昧着。ちゃんと厚生列車も来ていて、プラットホームには、総務長の秩父氏愛路班長の牧田氏、庶務班の井元氏、その他の人々が迎えに出てくれた。無事使命を果たして哈爾濱へ帰る黒沢さん山本さんとここで別れて、いよいよ厚生列車に乗り込む。とりあえず代表と同室させて貰うことになり、そこに荷物を下ろす。代表室だけに、ひどく立派ではあるが、なにしろ寝台が梯子なしの上段ときている上に、代表が満人の崔氏でお互いに言葉が通じない為の気づまりとで、些か憂鬱になる。それに船の疲れが一時に出たものか、心身共に物憂く、いまさらの如く旅は憂いもの辛いものの感じきり…。が、勇を鼓して食堂車で昼食、一休みの後、秩父君牧田君の案内で、これからまた数週間我が宿となる厚生列車を一通り見て回る。五色旗の色に塗られた十六輻連結の大型列車、堂々たる威容だ。内部もまた、設備装飾ともにゆきとどいていて、厚生船よりはまた一段とスマートである。機関車の方から順に数えて、最初の四輻が貨物。これに即売班で扱う物資が満載してある。その次が診療車。丁度診療中で、若い事務員が一人、薬剤師が一人、看護婦が二人、その一人は産婆の免許を持っていると後で知ったが、以上四人の日人が、若い一人の満人医師

を中心に、汗だくで奮闘中である。患者は殆ど満人ばかりのようであった。

即売車二輻。車内の三分の二が売り場で、残りの三分の一が買物客の通路。商

品は日常雑貨、洋品、化粧品、帽子、靴、下駄、食料品、酒類、文房具…。殆ど一通り揃えてある。また、この二輦の即売車の窓の下でも露天で食器類や荒物の類を売っているが、いずれも大入り満員の盛況。

次の一輦はコンパクトになっている寝台車。七室。乗組員首脳部の寝室兼事務室に当てられ、その中一室だけは畳敷で、そこが日人演芸班の婦人室。

娯楽車。これは厚生船には見られなかった設備で、珍しいと思った。通路を除くほか全部畳敷で、堂々たる十四畳敷だ。天井にも壁にも涼味あふる飾り物が施され、窓窓には植木が飾ってある。おまけに、室の一方には小さいながらステージのスクリーンの設備があり、レコード、碁、将棋、コリントゲーム、その他の遊びの道具も準備してある。

聞くと、開催中その地の人々に自由に利用させるほか、雨の日には演芸や映画もここで行うのだという。

食堂車。ここも乗務員の食事に差し支え無いかぎり、開催中その地の人々に開放される。つまり、山間、高原、砂漠、国境、そういった僻地に、年に一度都の香りを漂はせながら移動して来るところの、ささやかながらレストランであり喫茶店であり食堂である訳だ。私が通りかかった時は、丁度その一般開放の時間で、この地の近くに駐屯する兵隊さんや或いは着飾ったその妻子の人々が、通路も埋まるばかりに集まって来て、サイダーやアイスクリームやライスカレーに一刻を愉しんでをり、この春やと女学校を出たばかりだと言う愛嬌のよい二人のお嬢さん(給仕)が、甲斐甲斐しく汗だくで立ち働いていた。

食堂車に続く一輦は、料理場と食料倉庫。次の二輦は畳敷の寝台車、前に挙げた残り全部の乗組員がここに寝起きする。一人につき畳一枚の割りで区切ってある。丁度その一仕切りに満人芸人の一人が寝ころんで本を読んでいたのので、「暑い？」と聞くと「ええ、とても暑いです」と笑いながら、あざやかな日本語で答えた。最後尾の二輦は発電車に車掌車。

暖琿義勇隊訓練所の運動場で、厚生列車対オール暖琿連合軍の野球試合かあるというので、訓練所の見学を兼ねて、牧田君と応援に出掛ける。その試合には総務長の秩父君も出ているので、大いに声援これ努めたのだが、厚生列車軍の疲労ぶりは見るに堪えられない程なので、私は応援を打ち切り、牧田君と共に、訓練所を見学した。訓練所の見事な乳牛を見ながら、あんなに疲れている無残な負け方をする位なら、試合などしなければよいのに、と私が冗談を言うと、「所が、行く先々で、ああして試合をしようと楽しみに厚生列車の来るのを待っているのですよ。こちらは暇があれば、昼寝でもしたいところなんですが」と、牧田君は答えた。

これは私が迂闊であった。確かに野球の試合も厚生列車乗組員の任務の一つであろうし且つまた、乗組員の大部分が二十代の青年であることを思えば、よし疲れてはいるにしても、そういう方法によって余暇の時間を満たす方が彼らにとっても、幸福なのだ。

私は厚生船で、或る年配の人に聞かされた話を思い出した。以前は厚生列車や厚生船の乗組員の間に、男女問題が起こって、困るようなこともあったが、近年はそういうことが跡を絶ったので、我々の心配もすくなくなった、という話を。

千八百五十八年の暖琿条約で有名な暖琿城内は、駅から遠いので、割愛し、義勇隊のトラックに載せてもらって帰り、秩父君の案内で駅員の家庭に風呂を貰いに行く。厚生船では毎日ソヴィエトの岸を窓から眺めながら、入浴を楽しんだが、列車にはその設備がないので、こうした宿泊場の駅員が付近の住民の家に頼んで、風呂を沸かしてもらうのである。私が行ったその家の奥さんは、非常に愛嬌のよい人で、私がお湯に入っている間に、ちゃんと冷たい水でカルピスを溶かしてしてくれた。私は満州では奉天の水道の水以外は、生水を絶対に使わないことにしていたけれども、有り難くそのカルピスを頂戴した。

夜は満人の為の映画。なにしろ映画を見るのは、何年に一度とか、或いは、生まれてから未だ見たことがないと言う人々なのでそれはもう大変な人気だ。日の永い北満の夏の事とて、映画を始めたのが二十一時半で、その頃でも未だ空は明るく、スクリーンはぼやけていたが、見る方は何の不満もなく熱心に見入っていた。その一人一人の様子を詳しく観察したいと思ったが、何しろ、三週間の船上生活からそのまま列車へ転じて来ている私は疲れ甚だしく、今はもう、じっと立っていることさえ堪えられない程なので、寝室に引き上げる事にした。

六月二十九日

実に苦しい一夜であったが、ともかく幾らかでも眠れた為に、今朝は少し元気になり、駅構内の甚だしい汚い便所で不満足ながら用を足すと、更に厚生列車を乗り切ろうという勇氣も出て来た。

七時、点呼、東方遙拜。

八時、暖琿出発。九時五分、神武屯着。ここも国防上生まれた町で、駅の建物には銃眼が

ある。(数行略)

演芸は、駅構内の青草の上で、鉄道の枕木を積み重ねた舞台…、これはこうした性質の催しものとしては、実に巧妙で立派だと思ったが、その舞台を囲んだ×××人ばかりの兵隊さん、神武屯義勇隊の少年達、老若男女の満人達を見物

として、到着すると直ぐ始められた。見物の中には若い日本の女性の姿も二・三は見られたが、多くの御婦人が余興よりも即売の買物の方に気をとられているようであった。

満人芸人の曲芸が数幕。

大宮恵美子嬢の踊り。踊り子は別にもう一人いるのだが、それは昨日から病気なそうで、恵美子嬢だけで、国民進軍歌と春雨を踊った。この人はちょっと目立つ美しい人でもあったが、なにしろ、こういう所で——こういう北満の曠野の晴天井の下で、遙々と東京から来た若い娘の振り袖姿が嬉しかったのであろう。兵隊さん達は無論のこと、満人達も「テンハウ、テンハウ！」とお愛想を言いながら、熱心に見ていた。が、恵美子君の踊りが終り、次の林家奉峰君と静枝君の夫婦漫才が始まると、突然、バラバラと満州特有の大粒の雨がやって来て、忽ち、ざあツと凄い降りとなった。すると、盛んに熱弁を奮っていた妻君の方の静枝君は、ちょっと失礼！と幔幕を張った楽屋にひっこんだかと思うと、直ぐにからかさをさして出て来た。からかさ片手にやる漫才だ。これは漫才よりも愉快な風景であったが、しかし、それも極めて自然で、相手方は早速それを漫才に取り入れて笑わせていた。

今、こちらは雨期なので、からりと晴れた天気の日でも、突然こうして降りだして来るが、それでも一時間と続くことは少なく、直ぐにまた晴れるので、雨の合間合間を縫って予定の催しを終わると、十三時ここを出発。

十六時、黄金子着。ここも部落は駅から遠く、二里以上も離れているそうだが、部落民達は独特のアンペラのホロの馬車に一家族で乗って賑々しく詰めかけて来た。その数は相当のもので、黒龍江沿岸の部落では見られない盛況であった。材木を積み重ねたステージは、例の通りだが、ここは駅構内のスロープを利用して設けてあるので、見物には見やすく出来ている。その舞台に背景の紅白の幕と愛路の旗を張り巡らして、満人芸人の一人が、チャラン、チャランと鐘を鳴らすと、小学生達が先ず集まって来、それにつれて、ぞろりぞろりと父親（フーチン）や母親（ムーチン）が集まって来る。耳環ばかりがキラリと光る萎びた婆さんも来れば、長い煙管をくわえた爺さんも来る姑娘も来る…。

頃合いを見計らって愛路班員であり通訳である田さんが舞台に立って、開会を告げると代表の崔氏が立って一場の挨拶と講演をやる。それが十分足らずで終わると、もう一度、田さんが身振り手振りを加へ、碎いた調子で、愛路の必要や民族協和の理想を述べる。直接に満語で話しかけるのだから身を入れて聞いている。が、長談義は禁物だ。芸人が代わって愛路の歌を歌い出す。小学生達に誘われて、大人達も小声で歌い出す。それから、掛け合い漫才、曲芸、手品…。ここは満人ばかりのようだ。

余興を見、買い物を済まし、ついでに施療班で薬を貰った満人達は、一家でその買い物を抱えてアンペラの馬車に乗り、二里も三里も奥の部落へ、がたり、ことり…と帰ってゆく。

十八時、黄金子発。十九時五十四分、黒河着。

昨日ここを普通列車で立った私が、こんどは厚生列車でまた舞い戻って来たわけである。列車が着くや否や、顔なじみの厚生船の人々が、関の声を挙げながら駆けつけて来た。日本人だけではなく、満人の廉売班員もあれば、芸人の小孩もいた。

それらの中には船中では、ついぞ話もしなかったものもあったが、別れて見れば皆が三週間の朋友であった。みんながみんな、私が顔を出している窓の下に来て、やあやあと声をかける。

皆懐かしそうだ。